

# ヤコブの手紙 連続講解説教

始・二〇〇七年 六月 三日

至・二〇〇七年 一月一六日

辻 幸宏

本説教集は、二〇〇七年に大垣伝道所において説教を行い、説教要約としてまとめたものです。元来、このように説教集としてまとめる意思などはまったくなかったのですが、語った言葉に責任を持つことを考えた時、以前に語った言葉を隠しておくのではなく、公表し、読んでいただくことが必要かと思ひ、大宮教会小会の了承を得て、印刷する決断しました。

ヤコブの手紙は、公同書簡の最初に位置し、今後順次、公同書簡の中から説教集を印刷していく予定にしています。

個人において聖書を読む時、本説教集を共に読んでいただければ幸いです。

なお、説教には日付けを入れておきました。時事問題等は現在とは異なった状況にあるものもあるからです。

二〇二〇年八月

辻 幸宏

序

今日からヤコブの手紙と一緒に読み進みます。ヤコブの手紙は、新約聖書二七卷の二〇番目で、わずかに五章の短い手紙です。一般に公同書簡と呼ばれる七卷（ヤコブ、ペトロⅠ・Ⅱ、ヨハネⅠ・Ⅱ・Ⅲ、ユダ）の第一番目です。公同書簡とは、一般の手紙のように特定の宛先がなく、各教会で読まれることを目的としている手紙です。

### I. ヤコブ書の著者

ではヤコブ書は誰によって書かれたのでしょうか。「僕」（一節）とは「奴隷」のことです。つまり「神と主イエス・キリストの僕」とはキリスト者のことです。キリスト者にとって、神が主人であり、私たち自身は主の僕です。主が天地万物の創造主であり、私たち人間が被造物である関係を思い起こすことが求められています。そして私たちは主人である神からの御言葉を聞くことが求められており、ヤコブ書では既に主によって救われ教会の指導者として立てられたヤコブを通して、主の御言葉が語られています。

ヤコブとは、アブラハムの子・イサクの子ヤコブから名付けられています。そしてヤコブこそが、主なる神からイスラエルという名が与えられ（創世三二章二八節）、彼の息子たちが一二部族を形成していきます。従ってイスラエルでは子ども名として「ヤコブ」が多用されていました。新約聖書に、四人のヤコブが出てきます。有名な人は、十二使徒の一人、ヨハネの兄弟、ゼベタイの子ヤコブです（マタイ四章二一節、一〇章二節）。主イエスがペトロと共に最も信頼していた兄弟です（マルコ九章二節）。彼は紀元四四年に、ヘロデ・アグリッパによって殺された（使一二章二節）十二使徒最初の殉教者です。次に、同じく十二使徒の一人アルパヨの子ヤコブで（マタイ一〇章三節）、ゼベタイの子ヤコブ（大ヤコブ）に対して小ヤコブと呼ばれ（マルコ一五章四〇節）ています。最後に、主イエスの兄弟ヤコブ（マタイ一三章五五節、ガラテヤ一章九節）です。彼は、主イエスが十

字架上で死ぬ以前には、主イエスを信じませんでした（ヨハネ七章五節）、主の死後、復活の主の顕現に接して以来（Ⅰコリント一五章七節）、主を信じ、弟子の仲間に加えられたと考えられています（使徒一章一四節）。そして彼はエルサレム教会の指導的な地位にありました（使徒二章一七節、一五章一三節、二一章一八節、ガラテヤ二章九節、一二節）。そして伝承では、西暦六二年頃殉教したと言われています。一〇〇%断定することはできませんが、彼がこの手紙の著者であると、伝統的に教会は考えてきています。

### II. 離散している十二部族

では、「離散している十二部族の人たち」とは誰を指しているのでしょうか。離散している十二部族とは、旧約の時代、イスラエルがアッシリアに滅ぼされ捕囚の民とされた時、イスラエルの民は世界中に散らばって行った人たちで、今なお世界中にイスラエル人がおられます。一方「十二部族」とは、「イスラエル」のことを指し、血肉におけるイスラエル民族ではなく、霊においてイスラエルに属する者となったクリスチャンのことを語っているとも言えます（ローマ九章六〜八節）。すなわち肉による子供が神の子供なのではなく、約束に従って生まれる子供が、子孫と見なされます。神の約束によって、神によって召されたクリスチャンは、霊によるイスラエル（神の民）とされています。ですから、離散している十二部族とは、世界中に散らされているキリスト者です。つまり、ペンテコステにおいて全世界に散らばったキリスト者と共に、迫害下において信仰を守るために逃げていったキリスト者もいました。ヤコブはそうした離散したキリスト者に語りかけます。

### III. 私たちに語りかけるヤコブ書

それは同時に、時代を超えて、神の民クリスチャンとされた私たちに對して語られている言葉です。だからこそ私たちは、昔の古文としてこの手紙を読むのではなく、私たちの信仰を指し示すものとして、読み進むことが必要です。私たちは当時の歴史的背景を知らなければ読むことができませんが、同時に、この言葉は、時代を超え・空間を超えた、現在に生きる私たちに對して語りかけている言葉であることを忘れてはなりません。

最後にヤコブ書の特徴は信仰生活の規準を語ることで、主イエスの十字架から二〇年位が経ち、福音が広まってきている中、一方キリスト者の生活が主の教えから離れ、乱れが生じてきていました。そこでキリスト者に求められる生活についてヤコブは語ります。私たちは、既に主によって召され、信じる者とされていきます。そして神を信じる者の救いは、すでに二〇〇〇年前、十字架にお架かり下さったイエス・キリストの御業によって成し遂げられています。感謝と喜びをもって、主に従っていききたいものです。

## 「試練を喜ぶ」 ヤコブの手紙一章二〜八節

二〇〇七年六月一〇日

序・なぜ日本人は努力しないのか？

現在の日本社会では、「楽をして儲ける」、「苦しいことは行わない」風潮があり、3Kと呼ばれる「きつい」、「汚い」、「危険」と言った職業には嫌われていきます。なぜか？ 一つには、苦しまなくても生活できるからです。格差が広がっても、普通に暮らしていける人たちが多くいるからです。子どもが働かなくても、暮らしていける状況にあるからです。だからこそ、あえて苦難を選び取ることはなく、避けたいと思うのです。

もう一つ、今、年金問題で騒がれています。何十年と努力してきたことが報われないことを、皆がうすうす気付いているからです。

### I. 主の御支配と試練

こうした時代に、「試練を喜べ」と語っても、多くの人たちは耳を閉ざすでしょう。しかし私たちは安易に世の中に流されることなく、主の御言葉に耳を傾ける必要があります。ところで試練と言っても様々な種類の試練があります。仕事上のトラブル、失敗、人間関係……。しかし、主を信じることによってもたらされる試練もあります。キリスト者

は不正をしてまで金儲けをしません。その時に信仰の故に迫害も生じます。特に、ヤコブが手紙を書いている頃、キリストが天に昇られてから二〇年が経っています。ユダヤ人からは異端者として迫害を受け、異邦人からも迫害が始まっています。そうした状況の中、ヤコブは、苦しみ悩んでいるキリスト者に、励ましの手紙を語っています。

私たちは、弱さの故に、試練・苦しみがあれば、それを避けようとしません。しかし、そうした行為は、私たちの心の中の野心・ねたみ・欲望等の様々な罪から生じます。主は、私たちが傲慢になって主の御前に罪を繰り返すことがないように、試練をとおして、主の御前にある罪を示しておられます。

### II. 試練は聖化のため

また、私たちは「試練」を不幸なことであると考えます。しかしヤコブは、試練を喜びと思いなさいと語ります。発想の転換が必要です。人は、苦難があっても、それを乗り越えれば報いがあるとすれば、頑張ることができます。それが分からないから逃げるのです。しかし主は私たちに信仰を与え、罪の赦しと救いをお与え下さいました。そのためにキリストは十字架に死に、死からの復活を遂げました。つまり私たちは、今の苦しみを超えて与えられる祝福、つまり永遠の生命に目を向けなければなりません。すると試練からでも希望が生じます（ローマ五章三〜六節）。つまり、試練に忍耐することは、私たちの信仰が試されていることでもあります。試練は、信仰を訓練し、金属が精錬され純粋になっていくように、私たちは試練を通して信仰が訓練され、聖化されていきます（参照・ペトロ一章五〜七節）。つまり、私たちが試練を喜ぶことができるのは、試練を乗り越えることにより、さらに主なる神による救いがさらに揺るぎないものとなり、私たちが神の民に相応しい者として聖化されることを知っているからです。

### III. 信仰を試される試練

ヤコブは一章五で「知恵」が必要であると語ります。これは、霊的な洞察力です。試練を乗り越えるために、何もせず忍耐してその試練が過ぎ去るのを待っていればよいのでは

ありません。主が試練をお与えになるのであれば、主はそれを持ち越える力をお与え下さいます。だからこそ、すべてをお与え、すべてを取り去られる主なる神を信じ、疑うことなく、主にすべてを委ねて祈り求めることが求められています。

疑う者は、心が定まらず（二心のある人）、生き方全体に安定を欠く人です。つまり、神を信じている部分と疑っている部分があるのです。あるいは、主なる神を信じている部分と、他の神々を信じている部分があるのです。天秤に計る状態です。

ヤコブが「試練をも喜べ」と語る時、まさに私たちの信仰が問われています。主は、私たちを、既に、イエス・キリストの十字架によって救って下さっています。そして私たちは神の子とされています。天国における永遠の生命が約束されています。そうであるならば、私たちは、主によって与えられた試練をも、主が益として用いて下さることを信じ、主に委ねて歩んでいくことが求められています。

## 「真の誇り」 ヤコブの手紙一章九、一節

二〇〇七年六月二四日

### I. 価値観

私たちがこの世における生活を営むため、多くの者は経済的な豊かさを求めて生きます。それを否定することはできないでしょう。しかし同時に、経済的な貧しさ・身分的な低さ・差別の故に、多くの人たちが苦しんでいます。今の日本社会は、ヤコブの手紙が書かれた時代と比べると、文明が進歩していますが、なおも格差は広がり、食べること・寝ること一つに苦しむ多くの人たちもいます。そうした中、経済的な貧しさの中に生きている人たちは、富んでいる者に対する偏見、うらやみなどがあるでしょう。経済的豊かさが世における一番の価値基準であり、その他のことは受け入れられない社会だからです。

しかしヤコブはこうした歪んだ価値基準に「否」を語ります。最も祝福され、恵みに満たされている状態とは、神によって救われ、永遠の生命の約束に生きることです。つまり、地上の富に目が行く時、私たちは天上の富である神による真の救いから目を離してしまからです。また地上においていくらか富を蓄え、裕福な生活を送っていたとしても、富を天国に持つて行くことはできません（参照・マタイ六章一九、二一節）。私たちは、救いに関わる神の国に注目すべきで、それを指し示す御言葉に聞かなければなりません。それを忘れ、地上の富を追いかける時、私たちは信仰の道を踏み外してしまいます。

### II. 貧しさの中にある救いの希望

ヤコブは、「貧しい兄弟は、自分が高められることを誇りに思いなさい」（一章九節）と語ります。当時、日々の生活の貧しさ、身分の低さに嘆いている人たちがいました。奴隷もいました。多くの人々は、日々の生活に苦しみを覚え、生きていく希望すら失いかけていました。しかしここで語られている彼らは、同時に主にある「兄弟姉妹」でした。主によって救いに導かれていました。既に、キリストの十字架によって罪の贖いを受け、神の子とされています。新共同訳では「自分が高められる」と訳しますが、口語訳では「自分が高くされた」です。すでに、神の子としての身分が与えられています。新改訳では、「自分の高い身分」と訳しています。つまり信仰を告白してキリスト者となることは、すでにキリストの十字架の贖いによって罪が赦され、神の子として救いに入れられ、神の国における永遠の生命に入れられていることを、受け入れ、告白しています。ですから、口語訳や新改訳のように、現在完了形で訳されるのは、地上にあつて貧しさ・苦しみの中で、生活しているけれども、あなたはすでに神の子とされ、すべての特権が与えられていることを、語っています。

一方、未来形で訳す新共同訳は、苦しみの中に生活している現実を語っています。しかし、主によって与えられる復活の生命、神の御国における永遠の生命があり、神の子として祝福に満たされた歩みがあります。私たちは、その希望に生きることができます。

この二つの訳の違いは、キリスト者の姿そのものを表しています。すでに神によって救われ、神の子とされ、すべての特権が与えられる約束が与えられています。キリストの十字架の贖いは完成し、私たちの罪は取り除かれています。一方、今なお罪の残滓があり、世の苦しみの中、生きています。そして、神の国の完成を待たなければなりません。その時に与えられる祝福を待ち望むことが求められています。

この「すでに」と「いまだ」の両面を、キリスト者は持っています。

### Ⅲ. 地上における富

「富んでいる者は、自分が低くされることを誇りに思いなさい」（一章一〇節）。ここで語られている「富んでいる者」も、キリスト者とされている富んでいる者です。キリストは、金持ちが天の国に入るより、らくだが針の穴を通る方が易しい（マタイ一九・二三（二四節））と語られています。

しかし決して富んでいる者が救われたいとは語られていません。教会に経済的に成功した人も求められており、主イエスの弟子の徴税人マタイも金持ちだったと考えられます。教会において富んでいる者が取り除かれることがあってはなりません。そしてヤコブは、富んでいるキリスト者が、「低くされていることを誇りに思いなさい」と語ります。これは、真のキリスト者とされて、この世の身分や価値判断に目を惑わされることなく、真の富である神の救いを見ることができるようになっていくことを語っています。この「低くされている」とは、実際的な生活として、富があり、権力があり、身分の高さなどを投げ捨てると言うことではなく、そうした富・権力・身分にもかかわらず、主の御前にある遜りと謙虚さをもって、主に仕え、人々に仕えて生きることです。この低さは、誇る者はキリストしかなく、自らの内には罪が示され、主の御前に何も誇ることはないことが示されることであり、これこそがキリスト者の姿です。

「富んでいる者は草花のように滅び去るからです」（一章一〇b〜一一節）。ここでの「富」は、まさしく世の富を追い求め、神の救いを求めない人たちのことです。草が枯れ、

花が枯れるように、地上にあるものは、すべて消え失せます（イザヤ四〇章七〜八節）。地上の富を、何一つ天国に持つて行くことはできません。

私たちは、地上に生きていく時、経済的な必要を認め、豊かになりたいとの思いがあります。しかし、キリスト者としての真の誇りは、罪の故に死に行くべき者が、キリストの故に罪が赦され、永遠の生命が与えられた祝福に入られることです。この富は、永遠に朽ち果てることはありません。地上にあって、朽ち果てるものを追い求めるのではなく、永遠に朽ち果てることのない祝福・喜びを追い求めて、日々歩み続けていきましよう。

## 「試練と誘惑」

### ヤコブの手紙一章二〜一五節

二〇〇七年七月一日

#### 序

ヤコブは苦しみの中にある兄弟姉妹に対して、励ましの手紙を語っています。「試練」、「誘惑」という二つの語は、ギリシャ語原典ではどちらも「試み」という一つの語です。しかしヤコブは二つの語を、使い分けます。

#### I. 試練

ヤコブは、まず「試練」について語ります。「試練」を広辞苑で調べてみますと、「信仰・決心・実力の程度を試み試すこと。また、そのための苦難」とあります。誰が、私たちの信仰を試すのか？ 主なる神御自身です。なぜ？ それは信仰者・神の民とされた私たちの信仰が養われ、神の子に相応しい者とされるためです。そのため、ヤコブは、「試練を耐え忍ぶ人は幸いです。その人は適格者と認められ、神を愛する人々に約束された命の冠をいただくからです」（一章一二節）と語ります。このことを示す例がアブラハムに示されています。主は一〇〇歳になるアブラハムにイサクをお与え下さいました。そして

このイサクを通して、イスラエルが星のように多くなり、祝福されることを約束されてきました。しかし主は同時に、アブラハムにこの約束の子イサクを献げるように命じられず。主はアブラハムの信仰を試されたのです。しかし、アブラハムは結果を知りませんでした。主は、主に委ね、イサクを主に献げます。アブラハムの信仰は主によって認められ、祝福されました（創世二二章）。

また聖書は語ります。「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずで、神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてください」（I コリント一〇章一三節）。主は私たちに試練を与えられると同時に、支えて下されます。そして、親が子に対して、耐えられないことを強いられることがないように、耐えられるもの、乗り越えることができる試練を与えられます。

## II. 誘惑

一方誘惑は、神からではなく、他人、強いては悪霊（サタン）がもたらすものです。そのためヤコブは、「『神に誘惑されている』と言ってはなりません」と語ります。このことは、神と神の子とされた私たちとの関係から確認できます。主は天地万物を創造され、今なお全世界を治めておられます。そして私たちが罪の死から救い出し、永遠の生命に導いて下さいます。神が私たちを悪い道に誘い込むことはなく、正しい道をお与え下さいます。従って、人を惑わせ道を踏み外させるようなことを、主が行うことはありません。

悪霊は私たちの生活・信仰を誘惑します。偶像・異端、背教に対する働きかけです。従って「試練」が外的・肉体に及ぼす苦しみであるのに対して、「誘惑」はおもに内的・信仰に及ぼす苦しみです。もちろん、人を騙す詐欺のような外的苦しみもあります。そのために、私たちは誘惑をはねのける信仰が求められます。そしてヤコブは、「むしろ、人はそれぞれ、自分自身の欲望に引かれ、唆されて、誘惑に陥るのです」（一四節）と語ります。私たちはこの弱さを自分自身が持っていることを知っていなければなりません。

自分で戦うのではなく、自分では戦い得ない自分があることを知らなければなりません。そのために、私たちは主に祈り続け、主の助けを求めなければなりません。御言葉に聞き続け、どのような誘惑が待ち受けているか、知らなければなりません。御言葉と祈りにより、私たちは誘惑に遭っても耐え抜き、乗り越える信仰を与えられます。

しかしヤコブは、誘惑が悪霊によってもたらされることを語りません。それは、誘惑された者が、誘惑に負け罪を犯した時、サタンに責任転嫁して自らの責任を認めないからです。この例が、アダムとエバにもたらされた蛇の誘惑です（創世記三章）。蛇は女に善悪の知識を知る実を食べることにより、目が開け、神のようになれると誘惑します。女が食べ、そして男も食べます。そのことを主なる神が知った時、アダムは女の責任にし、女は蛇の責任にします。しかし、アダムは「食べたなら、死ぬ」との主の警告を聞いていました。アダムも女も、それを無視して取って食べたのです。ここに彼らの罪があり、彼らの責任があります。誘惑に屈指ず、それをはねのける信仰が私たちに求められています。しかし、その一方、自分の力では誘惑に戦うことはできない弱さも認めなければなりません。

「試練」は主によって与えられるが、主を信じることににより、それを乗り越える力が主から与えられるように、「誘惑」もまた、私たち自身で立ち向かうのではなく、主が語られる御言葉に聞き、主に委ねて祈り求めることにより、主は私たちを守り、戦いに打ち勝つ力をお与え下さいます。すでに主は私たちに、キリストの十字架による罪の赦しと、神の国における永遠の生命をお与え下さっています。だからこそ、この朽ちない宝である永遠の生命の希望に満たされ、試練に耐え、誘惑に打ち勝つ歩みが求められています。

今日お読みしたテキストは、前回までの所と一変します。前回、「試練に耐え忍びなさい。誘惑に陥るな」と語られてきました。なぜ、自分は試練や誘惑に遭わなければならぬのか、神は何を求めておられるのか、耐えられないと思う人もいることでしょう。そこでヤコブは、「私たちの愛する兄弟たち、思い違いをしてはいけません」（一六節）と語ります。ここで私たちにとって主なる神がどのような存在であるかが問われています。

### I. 父なる神

「良い贈り物、完全な賜物はみな、上から、光の源である御父から来るのです」（一七節）。「上」とは、もちろん神のことです。そして御父である神は、光の源です。この表現は、創世記一章の天地万物の創造が背景にあります。ここでの「光」は、ただ単に「太陽」の光ではなく、天地万物の代表であり、生命の根源を指しています。しかしヤコブは、「太陽」が偶像として信仰の対象となっていないことも知っており、「御父には、移り変わりも、天体の動きにつれて生ずる陰もありません」と言う言葉を付け加えます。「光」は偶像で、礼拝の対象ではありません。主は永遠から永遠に生きておられ、変わることはないお方です。

そして「神は光を見て、良しとされた」（創世記一章四節）と語ります。天地創造を終えた時にも、「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった」（一章三節）。と語ります。つまり父なる神が下さるものは、良い贈り物だけで、悪いものは、何一つあり得ません。

そもそも「悪いもの」とは、罪に関わることであり、神がお与え下さった律法（十戒）に照らして、私たちが行い・言葉・心において守ることのできない事です。そして、神御自身はこれらの罪は持つておられません。これは神の御性質にも関係します。ウエストミンスター小教理問答書問四は、次のように語ります。問「神は、どのようなお方ですか」。答「神は、その存在・知恵・力・聖性・義・慈しみ・まことにおいて、無限・永遠・不

変の霊です」。

神は、聖（聖さ）、義（義しさ）、慈しみ、真（真実）であられ、「罪」はありません。つまり、罪を持つておられない主が、罪を私たち人間に与えることはできません。

創造主である神が、被造物である私たち人間にお与え下さるものは、良い贈り物だけです。だからこそ、私たちは試練・誘惑といった困難・苦しみに対して、主なる神の責任にすることを待つてはなりません。主は私たち人間に必要なものを与えられるのであり、主が試練をお与えになられているのであれば、それは同時に主はそれを乗り越える力・それに勝る益をお与え下さいます（参照・Iコリント一〇章一三節）。

### II. 真理の言葉「生かす私たち」

次に主が試練や誘惑を含め良い贈り物を下さる根拠が語られます（一八節）。それは、真理の言葉によって私たちが生んでくださるためです。ここでの「生まれる」とは、母親から子どもが生まれることではなく、再生（神の子として生まれ変わる）ことです。私たち人間は、生まれながら罪の中、肉に生き、罪の滅びに至る者でした。しかし神によって生まれ変わるにより、神の子として、罪のない者として生きるものとされます。そのために、御子イエス・キリストは、私たちに代わって十字架に架けられ、死を遂げてくださったしました。これこそが、私たちに与えられた完全な賜物である救いです。

私たちはこの後、聖餐の礼典に与りますが、示されたパンを見て、食することで十字架の上のキリストの体を覚えます。杯に注がれたワインを見て、飲むことにより、十字架の上のキリストが流された血を覚えます。そしてなおも、日々、新たな恵み・賜物を、主は私たちにお示し下さり、養い続けて下さっています。

そしてヤコブは最後に、「それは、わたしたちを、いわば造られたものの初穂となさるためです」と語ります。主は私たちが御言葉により養い、真の救い、最上の贈り物をお送り下さっています。この主の愛の御業を私たちにだけに留めておいてはなりません。私たちが与った救いの喜びが、真理の言葉である聖書により、私たちをとおして、さらに多く

の人々に伝えられていくことが求められています。初穂である以上、次に芽生えてきます。そのために、信仰の継承がなされ、福音宣教が求められています。

## 「人の話しを聞く」

### ヤコブの手紙一章一九～二二節

二〇〇七年七月二二日

#### 序

今日の説教題は、倫理的・道徳的な表題となっておりますが、私たちは主がヤコブを通してお語り下さった信仰の言葉として、今日の御言葉に耳を傾けることが求められています。

#### I. 話すのに遅くしろ

私たちは、社会生活を行うにあたり、様々な場面で、自分の意見を言うことが求められます。そして現在では自己主張することが求められています。しかし主がここで問題とされていることは、私たちが語る言葉です。私たちがとっさに口から発する言葉のどこに問題があるのか考えなければなりません。

マタイ福音書一五章でファリサイ人と律法学者は、主イエスのもとに来て、弟子たちが食事の前に「手を洗わない」ことを咎めます(二節)。このことに関して、主イエスは口に入るものが人を汚すのではなく、口から出てくるものが人を汚すのであり、私たちの口から発せられる言葉にこそ罪があることを語ります(一五章一〇～一一節、一六～二〇節)。

ですから、ヤコブが「話すのに遅く」と語るのには、考えずに自分の意見を語ることで、私たち人間の本来持っている罪が、口から発せられることを語っています。つまりすぐに語ることによって罪が生じることをしないために、考えて言葉を発するように語っています。

#### II. 聞くのに早くしろ！

一方ヤコブは「聞くのに早く」と語ります。ここで問題となるのは、「誰」の話しを聞くかです。一つには、もちろん、会話をしている相手の話しを聞くことは必要です。しかしここでもう一つ考えておかなければならないことは、神の言葉に聞くことです。実はこちらの方が重要です。

最初に「人の話しを聞く」ことに注目します。「人の話しを良く聞きなさい。人の話しを聞く時は、その人の目を見なさい」。こうしたことを家庭で子どもたちに教えるように、社会的な常識です。相手の言葉の真意を聞くことが求められます。それはその話しが、主の御言葉(真理)に一致しているか否かを判断することが求められています。

しかしここで何よりも求められていることは、主の御言葉に聞くことです。先程、私たちの内にあるものは、罪であることを御言葉から確認しましたが、私たちが人の前で話しを行うおうとすれば、こうした罪を、主がお語りする御言葉によって修正することが求められます。つまり、「聞くのに早く、話すのに遅く」あるべきだと語られるのは、まず御言葉に聞き、主によって示された真理に照らされ、自らの意見を正した上で、人に対しても語ることが求められています。

#### III. 御言葉によって成長するキリスト者となれ！

「だから、あらゆる汚れやあふれるほどの悪を素直に捨て去り、心に植え付けられた御言葉を受け入れなさい。この御言葉は、あなたがたの魂を救うことができます」(二二節)。

私たち人間の本来持っているもの、それはあらゆる汚れであり、溢れるほどの悪であるとヤコブは語ります。神学的な言葉を語れば、全的墮落です。私たち人間は、皆が、生まれながらにして罪(原罪)を持っており、魂と肉体のすべてが、全面的に汚れています。そのため、口から発せられる言葉のみならず、行いにおいても、心の中にあっても、罪が繰り返されます。こうした罪を持ったままでは、私たちは良き行いも、正しいことを語る



こともできません。そのために私たちは、御言葉に聞くことが求められています。御言葉によつて真理が示されることにより、イエス・キリストの十字架によつて、私たちの罪の贖いが行われ、罪赦され、神の救いに生きることが求められています。そして私たちはキリストによつて罪赦された者として、主が語られる御言葉に聞き、物事を判断することが求められています。

マタイによる福音書一三章には種を蒔く人の譬えが語られています。良い土地に種が蒔かれ、根が張り、立派に成長するように、私たちも御言葉によつて養われ、主が語られる御言葉を実践し、語ることが求められています。つまり、私たちは常に御言葉を土台に生きる事が求められています(マタイ七章二四〜二七節)。

## 「御言葉を行う者」

### ヤコブの手紙一章二二〜二五節

二〇〇七年七月二九日

#### I. 第一に御言葉を聞くこと

主は、毎週日曜日には教会の礼拝に出席することを求められます。また、できる限り主の日の集会、週間の祈禱会などの集会にも出席することを求めます。さらに毎日、家庭でも個人でも聖書を読むことを薦めています。それは、何よりも、御言葉である聖書の言葉に聞き、主を礼拝することです。そして御言葉を疎かにしての行いはあつてはなりません。教会で奉仕することの大切さ、伝道することの大切さが語られると、御言葉をそっちのけで、主の日であつても、朝から奉仕活動を行い、伝道活動を行う人たちもいます。しかし、聖書はそうしたこと語っていません。

一つの譬えとして、マルタとマリアの話があります(ルカ一〇章三八〜四二節)。主イエスが二人の姉妹の家を訪ねた時、姉のマルタは主イエスの接待を行うために準備を行

いますが、妹のマリアは主イエスの御言葉を聞くために主イエスの前に座ります。ここでマルタは主イエスに対して、マリアに注意をするよう促しますが、主イエスは「必要なことはただ一つだけである。マリアはよい方を選んだ」と語られます。

#### II. 御言葉によつて自らを省みよ!

ところでヤコブは「御言葉を行う人になりなさい」(二二節)と語ります。つまり、私たちは御言葉に聞くだけでよいのか、キリスト者として生きるとはどういうことか。つまり御言葉の聞き方が問われています。ヤコブは語ります。「自分を欺いて、聞くだけで終わる者になつてはいけません」(二二節)。つまり主の御言葉を聞く時、「良い話しを聞いた。素晴らしかった」では終わりません。主が御言葉を語り、主イエスが模範を示して下さいました。それが語られた時、知的理解だけで終わつてはなりません。

聖書を昔話として読んではいけません。他人事ではありません。時代も、国も、文化も、言葉も超えて、主は普遍的な言葉として、今のこの日本に生きる私たちに語りかけて下さっています。御言葉によつて、自らの罪の姿、神による救い、キリストによる一方的な贖いが語られています。そうすれば救われた者として、罪に留まり続けることは許されません。キリストは模範を示し、自らに倣うよう求めておられます。

御言葉は私たち自身を写す鏡そのものです。私たちは鏡を見て、髪型や服装などを整えたりします。同様に、自らの罪の姿が示された時、すぐに悔い改めること、律法に合った生活を行うことが求められています。イスラエルの罪の姿は、私たち自身を写す鏡そのものです。人は弱いもので、聞いてもすぐに悔い改めを行わなければ、忘れてしまいます。御言葉を聞いても聞きっぱなしとなり、罪は放置されたままとなります。忘れやすいからこそ、繰り返し御言葉に聞く必要があります。その都度、罪の悔い改めが求められます。そうすることによりキリスト者として成長します。ですから、「神を信じた。洗礼を受けた。だから今日から一人前のクリスチャンだ」と言った所で、それはスタートラインに立ったに過ぎず、私たちは、日々御言葉に聞き、自らの姿を顧み、悔い改め、主の御声に聞き従

つていくことが求められています。

### Ⅲ・御言葉を行おう！

ヤコブは「自由をもたらす完全な律法を一心に見つめよ」（二五節）と語ります。律法とは、旧約聖書のことです。他の箇所では多くの場合「律法と預言者」と語られています。「自由をもたらす完全な律法」。これは律法学者たちを意識した言葉です。律法学者たちは、聖書に様々な律法を付け加え守るべきものを定めていました。それは人を自由にするどころか、逆に自由を縛っていました。しかし、本来、主がお語り下さった御言葉は、人々を縛るものではありません。「メシアによってあなたたちは救われ、自由になったのです。だからこそ、感謝と喜びをもって、主に従いなさい。主に従うことにより、再び罪の道を歩むことなく、救いの道を歩むことができるのですよ」とお語り下さいます。

主は私たちを教会へと招き下さり、「御言葉を受け入れなさい」とお語り下さいます。私たちの罪の赦しは、すでに二〇〇〇年前、主イエス・キリストの十字架によって成し遂げられました。主を信じる者は、すでにキリストの十字架によって、罪から解放されています。ただ私たちはなおも罪の中歩んでいます。罪赦された罪人です。だからこそ、主がお語り下さった御言葉に耳を傾け、真理を求める必要があります。御言葉は、一度聞いても忘れてしまうことが多いでしょう。だからこそ繰り返して主の御言葉に聞き、自らの事として受け入れ、主の示された生活が求められています。

### 「自分の心を欺く」

ヤコブの手紙 一章二六、二七節

二〇〇七年八月五日

### 序・自分を欺くとは？

普通の日本語ですと、「人を欺く」とか「人に欺かれる」と言うでしょう。しかし、聖

書は、「自分の心を欺いている」と語ります。これはどういうことでしょうか。ここには、自らの信仰（心）と行いの関係、両者の乖離があることが問題とされています。

### I・行いによって救われる？

主イエスは律法学者たちを繰り返し非難しましたが、律法学者の誤りは、律法主義に陥ること、つまり、律法を全うすることによって救われると考えていたことです。しかし、私たち人間は律法を全うして救われるわけではありません。私たちが人間は律法を全うすることができないからです。このことを主イエスは金持ちの青年の譬えで語っています（マタイ一九章一六、二五節）。この青年の問題点は、彼が信仰に基づいて律法を全うしており、その行いによって救われる権利があると思っていたことです。しかし主イエスは、彼の行いには足りない部分があることを指摘します。それが貧しい人々への施しです。このことは、主が律法である十戒を我々に何を目的として与えられているかを考えれば、理解できます。律法の要約がマタイ二二章三四、四〇節（参照・ウエストミンスター小教理問答問四二）に記されています。つまり、金持ちの青年に欠けていたものは、律法を守ることに必要な隣人への愛であり、行いとは愛に基づいたことです。愛の伴わない形だけの行いは意味がありません。言い換えれば、人は誰も自分の行いによって律法を全うすることができない罪人であることに気付くべきであり、主なる神を信じる以外に救いの道はありません。

### II・信仰の裏切りの善き行い

しかし主は、神を信じれば、どの様な生活を行っていても良いとも語られています。私たちは、真にイエス・キリストの十字架によって自分自身の罪が赦され、神による永遠の生命の救いに入れていることを信じています。自らの行いによってキリストが十字架に架けられたことを思えば、放縦な生活など送ることはできません。主の御前に、律法に従い得ない自分がいます。しかし、主は、私たちの行いによってではなく、ただ主イエ

ス・キリストを信じるが故に、キリストの十字架によって罪を赦し、救って下さいました。この神の愛、キリストの愛が、本当に示されれば、主の御前に罪とされることを繰り返すことは無くなるのではないのでしょうか。

ヤコブは語ります。「自分は信心深い者だと思っても、舌を制することができず、自分の心を欺くならば、そのような人の信心は無意味です」(二六節)。「自分が信心深い者だ」とは、「自分は宗教に熱心である」(新改訳)です。つまり自分の信仰を他人と比較して立派であると語っているのではなく、宗教的礼拝に熱心である、誰よりも熱心に神礼拝を守り、教会での奉仕を立派に行っていると自負していることです。そして、信心深いのであれば、当然、主がお語り下さる御言葉に聞き従い、信仰の実りとしての善き行い、つまり律法に従って歩み続ける者とされていきます(参照・ウェストミンスター信仰告白一六章二節)。

しかし、舌を制することができず、己の欲望のままに人に語り、人を傷つけ、人の痛みを顧みない言葉を発する者がいます(二六節)。こうした行為は、主の御言葉を反する行為です。これがヤコブの語る自分の心を欺くことです。人を傷つける言葉を平気に語る者が、真の主への信仰を持っているとは言えません。つまり、私たちの主への信仰は、心の内だけに留まることなく、行動・口から発せられる言葉・心の感情にすべて表れてきます。

### Ⅲ. 信仰にもとづく愛

ヤコブは二七節で、信仰に基づく愛の実践を語ります。みなしごや、やもめが困っているときに世話をすること、見返りを期待した行いは、決して愛に基づいた行動ではありません。現在の日本では、最低限の社会保証はあります。しかし聖書の時代、社会保障などありません。みなしごややもめが自分の手で稼ぐことなどできません。従って見返りを期待するはできません。ルカ福音書一〇章二五節にあります善きサマリア人も、同様に見返りを期待しない行いです。そうした人々を世話することは、神の愛の実践そのものです。キリストの十字架もまた私たちに与えられた無償の愛であり、キリストの十字架に倣う行

いが求められています。

自分を欺かない信仰生活とは、御言葉を通して自らの罪を認め、悔い改めて、キリストに倣う者となることであり、信仰の実りとしての行動において愛の業を行うことができるものとされる事です。神を礼拝する信仰と日々の行いが一致する時、私たちの信仰もまた、主によって喜ばれるものとなります。

## 「身なりで判断する」

### ヤコブの手紙二章一、五節

二〇〇七年八月二六日

## 序

人はある程度身なりを整えて、他人からの信頼を得ることは必要でしょう。今日の御言葉は、身なりを気にする人と共に、権力・身分相応の身なりの人を、キリスト者である私たちがどの様に見るべきかを教えます。つまりここでは、他人の身なりを云々言うのではなく、信仰から生じる私たちがそれをどのように受けとめるかを考えようとしています。

### I. 教会の集い

「集まり」(二節)、今までの訳では「会堂」と訳されていた語です。これは教会を表す「エクレシア」ではなく、ユダヤ教における「集まり」を表す「シナゴグ」です。この語は、福音書・使徒言行録では頻繁に用いられていました。が、書簡では他に全く用いられていません。ここでは教会での礼拝ではなく、教会内の公的な集いか、有志の集まりであったと推測することができるよう。それは「あなたがたの集まり」であり、キリスト者が中心に集い、そこに求道者なり神を求める人たちも連なっていると考えられます。

そこに二人の人たちが入って来ます。彼らが信仰を持っていたか否か、人に連れられてきたのか、一人で来たのか等、彼らの背景は全く語られていません。知らなくても良いの

です。ここでの問題は、彼らに対して私たちキリスト者がどの様に対応するかです。

## Ⅱ・集會に集う者たち

一人は金の指輪をはめた立派な身なりの人です(二節)。「金の指輪」は、立派な装飾が施されている見せるための指輪ではありません。当時、指輪は権威と威厳の象徴であり、榮譽、地位を示します。地位を印字した印章付きの指輪かも知れません。ですから、彼はそれなりの地位に着いていました。そのため彼が入ってくると、誰もが一目を置き、無礼に当たらないように対応します。しかしそこには、人それぞれの思いがあります。ある人は、彼の地位に取り入りたいがために彼に接します。逆に、反感を持たれたくない人もいたでしょう。またある人は、彼にあこがれをもって接していたでしょう。

次に貧しい人(二節)が集會に来ます。彼は汚らしい服装です。その日一日を暮らすのがやっとで、新しい服を買うどころか、着替えることもできず、風呂に入れず、洗濯もしていなかったことでしょう。ですから異臭も漂っていたでしょう。現在でいうホームレスです。人は彼には近寄ろうとしません。最近、横浜で公園に寝泊まりしているホームレスを、少年が殺すという事件がありました。彼は捕まった後も反省することなく「くずはいなくなっても構わない」と語ったそうです。社会的に決して許されない言葉ですが、大なり小なり彼のような思いに立っている人も少なくありません。身なりで、彼の社会的存在価値を抹殺しています。ヤコブ書において語られている教会の集會に集っているキリスト者も同じ態度です。そして私たちも無意識の内に同じ行動をしているのではないのでしょうか。

## Ⅲ・主によって招かれた人たちに対する対応

私たちが考えなければならぬのは、ここが「あなたがたの集まり」であったことです。つまりキリスト者により、キリストを宣べ伝える集會です。キリストがお招き下さった民が集っており、ここに来ているすべての人を、主御自身が招いて下さっています。

そして主は集會に集っている人をどこに招こうとされているのでしょうか。主は、今も

神の国において栄光に満ちておられるお方です(一節)。そのお方が招いて下さるので、神の国に集うすべての民もまた主によって栄光に満ちた神の国に招かれています。

ゼカリヤ書三章の幻は、バビロン捕囚から帰還しようとしているイスラエルの民に対して語られています。大祭司であっても汚れた衣を着ています。異教の地バビロンにおける偶像の汚れです。しかし彼は主によって召された大祭司でした。そのため主は彼をサタンの虜にすることをお許しになりません。主は、彼を主の御前に立たせる時、汚れた衣を脱がせ、晴れ着をお与え下さいます。それは彼を汚れた罪の世界から解放し、罪のない神の国にお導き下さるからであり、それは神の国・神の栄光に相応しい服装です。罪に汚れた服装から神の栄光に相応しい晴れ着に着替えさせて下さるのは、主なる神です。

ヤコブの手紙において主によって招かれた二人の人もまた、同様のことが起こります。立派な身なりの人も、主の御前に出るのに相応しい服装が与えられます。また汚らしい服装の人にも与えられます。地上において差別される要因となるものは、主の御前に、すべて取り除かれます。だからこそ、私たちは人を身なりで判断し、区別してはなりません。特にそれが主がお招き下さる神礼拝・諸集會であればなおさらのことです。

「世における貧しさ」

ヤコブの手紙 二章五、九節

二〇〇七年九月二日

## I・貧しい人を救いに導く主

ヤコブは金持ちと貧しい者と分け隔てをしておはならないと語り、特に貧しい者に注目します。通常、人は貧しい者よりも金持ちに対して配慮しますが、「そうであってはならない」と語りつつ、貧しい者に対して目を向けることを主は訴えています。このことは、主イエス御自身の宣教によっても明らかです。聖書を開いて確認しましょう。

ルカ四章一六節 主イエスは、故郷ナザレの会堂において教えられています。この時、イザヤ六一章一、二を読まれます（四章一八、一九節）。そして続けて主イエスは語られます。「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」（二一節）。イエス御自身が、主によって油注がれたメシアであり、救い主であることを語る時に、特にこの福音が伝えられるのは、貧しい人であり、捕らわれている人、目の見えない人、圧迫されている人です。

## Ⅱ・富んでいる者

なぜ貧しい者に福音が届けられるのか？ その原因は富んでいる者たちに問題があるからです。ヤコブは二つ語ります。第一に富んでいる者たちこそ、あなたがたをひどい目に遭わせ、裁判所へ引っ張って行くからです（六節）。貧しい者たちは、負債を抱えることが多くあり、その負債のため金持ちたちは、彼らを裁判所に引っぱって行き、不当な利息を取り立てます。そして裁判によって、当時は権力者の側に有利な判決が下さることが多くありました。裁判に当たっては、偏りがあつてはなりません（申命記一章一六、一八節）。

第二に彼らはキリストの御名を冒瀆しているからです（七節）。主がお語りになる御言葉に聞こうとはせず、御言葉に代わる別のものに自分自身を委ねているからです。ルカ福音書一八章には、金持ちの議員の話があります。金持ちの議員も救いを求め、律法を守ります。しかし、彼は主の御言葉に聞き従うことができせん。主イエスは彼に「あなたが欠けているものがまだ一つある。持っている物をすべて売り払い、貧しい人々に分けやりなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい」（一八章二二節）と語ります。彼は守るべき富がありました。そして隣にいる貧しい人たちの苦しみを覚えることができせんでした。人は、富・権力を捨てることができせん。非常に難しいことです。イエスは語ります。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」

## （一八章二四、二五節）

そしてもう一つ、当然のことですが、富を神の国（天国）に持って行くことはできません（ルカ一二章一三、二一節）。つまり、人は、権力・富によって自らを誇示しようとし、またそれを失うことを非常に恐れます。しかし、人はそれを天国まで持って行くことはできません。また、人が権力や富を有すれば、主なる神のみを見上げることはできなくなり、主の御言葉に耳を傾けることができなくなります。主の御言葉に聞き従う前に、自分の地位・富を守ろうとして、相反する御言葉で語られる主の命令に従うことができせん。ここに自分中心の姿があります。権力・富が、偶像化しています。そしてここには、隣人を愛することができない自分があります（八節）。だからこそ、権力や富を持っている人が、真に主なる神による救いを受け入れることは難しいのです。そして、神の御言葉は二の次になってしまいます。だからこそ主の招きがあつても、すぐに対応できません（ルカ一四章一五、二四節）。そして結果的に、世における貧しさ、身体的な障害を持つ者が主の救いに与るのです。彼らは自ら固執するものがなく、主の御言葉に聞き従うからです。

## Ⅲ・富・権力を主人にするべからず

主なる神は私たちを罪の死から救い出して下さいます。罪を赦し、永遠の生命をお与え下さいます。そのために御子イエス・キリストは十字架にお架かり下さいました。私たちは、富・権力・善き業によって救われるのではなく、ただ主の一方的な恵みです。それを無条件に受け入れることが求められています。つまり、私たちにとって主人は主なる神お一人であり、富や権力が主人となつてはなりません（マタイ六章二四節）。そして主が命じられる御言葉を私たちが聞く時、私たちは条件を付けてはなりません。無条件にすべてを主に委ねて御言葉にひれ伏すことが求められています（Iコリント一章二六、三〇節）。世における貧しさ、それは経済的な貧しさではなく、私たちの心の欲望の貧しさであり、それらを捨てて、ただ救いに導いて下さる主なる神のみを見上げることが求められています。

だからこそ、主イエスは山上の垂訓においてこの様にお語り下さいませ。「心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである」(マタイ五章三節)。

## 「律法を実行するとは」

### ヤコブの手紙二章八、一三節

二〇〇七年九月九日

## 序

主は掟である律法を定め、主を信じ、主に従う私たちに律法に従うように求めておられます。その律法の核をなしているのが十戒です。この主が命じられている律法に対して、私たちキリスト者は、どのように向き合うべきなのでしょう。

### I. 隣人を愛すること

ヤコブは、立派な身なりの人と汚らしい服装の貧しい人とを差別してはならないと語りました。それは、あなたにとっての隣人とは誰かが問題となっておりません。レビ記一九章には、隣人のために行うことが語られています。収穫物はすべて取り尽くさず、貧しい者・寄留者のために残しておくように命じます(九、一〇節)。労働賃金は当日払うように命じるのも(一三節)、貧しい者の不利益のことを考えてのことです。耳の聞こえない者・目の見えない者、つまり肉体的な障害者にも差別を行ってはなりません(一四節)。つまり隣人とは、貧しい者・弱い者・体に障害を持っている者など社会的弱者も含まれていきます。さらに言えば主が語られる隣人とは、私たちが全く関係のない人だと思っている人たちを含む、全世界の人であり、社会身分、民族、国家の違いを問題にしてはなりません。

これは現代的な問題です。金持ちと貧乏という社会的な問題は、現在日本でも深刻です。さらに、国と国、民族間の問題にもつながります。今なお世界中で、テロの名の下、戦争が行われています。日本もそれに協力し、また戦争を行うことが可能にする政治的な動き

も盛んです。武器を持ち戦争することは、相手を「隣人ではない」と公言することです。

聖書は、ある人を「隣人とし」、別の人を「隣人ではない」と区別することを否定しています。従ってキリスト教会は、戦争を行える国になることを是認することはできないはずです。二〇〇〇年の教会の歴史を見ると、キリスト教国にあっても、戦争を行ってきましました。主の御前に罪を告白し、悔い改めるべきです。そのためにも、私たちは日本国憲法第九条を擁護すべきです。人と人、国と国を分け隔てすることは、主の御前に罪を犯すこととなります。主の御前に行われる罪は、どれ一つをとっても律法の違反であり、それはすべて死に値する違反です。

### II. 律法によって示される罪

ヤコブは、今まで隣人の対象者に関して語ってきましたが、続けて律法を守るとはどういう事であるのかを語ります(一〇、一一節)。つまり、「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」とは具体的にどの様な律法を指しているのかと言うことです。第五戒から第十戒のすべてです。主は、これらの戒めをすべて守ることを求めておられます。しかも、主はすべてを支配されている方であり、私たちは何も隠すことはできません。主の御前にこれらの戒めを守ることは、行い・言葉・心の中すべてにおいてこれらの戒めを守ることです。

しかし、私たち人間には不可能なことです。つまり、主が命じておられる律法を、完全に守れる者など誰一人いません。私たちはそのことに気付き、主の御前に罪人であること、つまり最後の審判において、刑罰を免れることはできません(一二節)。そのため、私たちは主の御前で罪を恥じ、悔い改めを行い、赦しを請うことしかできません。

### III. 救いと救いに伴う善き業

しかし主は、私たちを永遠の死に至らせるためだけに、私たちの罪を指摘している訳ではありません。同時に主を受け入れる者に、主による救いを提示して下さっています。こ

れが福音です。主イエスは、私たち神の民に代わって、地上の生涯の間、律法を完全に守って下さいました。そして、神を信じるすべての民の罪を償うために、キリストは十字架の上に苦しまれ、死を遂げられました。私たちは、自らの罪を受け入れ、罪を悔い改め、主イエスによる十字架の御業を受け入れることにより、罪の赦しが与えられ、主による救いが与えられ、天国における永遠の生命が約束されています。この救いを覚えるため、私たちは主の晩餐の礼典に与ります。

私たちが全身で救いの感謝に満ち、救いの喜びに満たされていれば、不完全ながらも、主が求めておられる律法に従う者へと変えられていきます。困っている隣人に手を差し向けることは非常に勇気のいることです。しかし救いの喜びに満ちた者は、主によって押し出されて行動します。そして憐れみに満ちた行為を、主も良しとして下さいます。

## 「信仰に基づく行い」

### ヤコブの手紙二章一四〜一七節

二〇〇七年九月一六日

序

宗教改革を始めたルターは、パウロの記したローマ書より「信仰義認」を強調しました。それは、律法を全うしたことによって救いを獲得したのではなく、主が一方的な恵みにより救いをお与え下さることから来ている教理です。これは当時のカトリック教会が、御言葉が語っていない免罪符の金銭的売買を行い、行動によって救いを得ることができるようになることを語っていたことに対する、聖書に聞き従った抵抗です。福音主義プロテスタント教会である私たち改革派教会も、同じ立場に立っています。

### I. 「律法主義」に非ず、また「律法廃棄論」に非ず

しかしルターは、二章一四節の御言葉を代表とするヤコブ書を「藁の書」と呼び、他の書簡より劣ったものと位置づけました。結果的に信仰を持った後のキリスト者の生活に關してはあまり顧みないこととなり、後の時代、ルターは意図していなかったのですが、「神を信じれば、何を行っても良いのだ」という考えも出てきます。しかし、主により信仰が与えられた者は行いが伴うことを、聖書は語ります(二章一四節)。このことは、信仰義認を強調したとされるパウロも語ることで(ガラテヤ五章二二〜二三節)。

従って、改革派教会では創立宣言において、三本柱(信仰告白、教会政治、善き生活)を主張しますが、その中の善き生活において、「我等は律法主義者に非らず、又律法排棄論者に非らず」と告白します。

主は私たちの生まれる前から、永遠の予定により、私たちを神の子として定めて下さっています。私たちは罪があるため、自らの行いによっては誰一人、主の救いに相応しくなることなどできません。罪人である私たちは、十字架によって一方的にすべての罪が赦されて、救われるしか方法はありません。そして、私たちは御言葉により、自らの罪を知り、主なる神を知り、主なる神を信じて告白します。そして救われたことの感謝と喜びに包まれて日々歩みます。そうすれば、罪の中に留まり続けることができなくなり、神の子として相応しくあるうとして、キリストの生活に倣おうとします。それが聖化であり、善き業へとつながります。

そして、私たちがキリストに倣うために律法である十戒が与えられています。十戒により私たちは自らの罪を知りますが、同時に信仰が与えられた神の子にとっては、神の聖・義・真実が示されており、十戒によりキリストに倣う生活が可能となります。

### II. 私たちの立つべき信仰の立場

私たちに今問われていることは、信仰のあり方です。つまり「神を信じる」と言うことは誰でも言えるのであり、心が伴っていないくても言えます。仮にキリスト者を迫害しようとしているスパイが教会に潜入することさえ、なきにしもあらずです。

しかし私たちが主によって救われ信仰生活を続けることは、口先だけではできません。

主の御前に立たされた時、律法によって示された己の罪がどれ程大きなものであるか。十戒に記された言葉において、行いばかりか、言葉、心の中まで問われています。私たちの心の中まですべて主はご存じです。そして何一つ、反論することができません。私たちはその罪を受け入れざるを得ません。それは永遠の死に至る刑罰が伴うことです。

しかしキリストは、この私たちのすべての罪を背負い、十字架にお架かり下さいました。私たちの罪は、キリストの十字架によって一方的に贖われました。

口先だけ、頭の中だけで理解、思弁的な信仰となってはなりません。日本の教会はまさに思弁的でした。戦時中、神を信じると語りながらも、天皇を崇拜し、神社参拝を行いました。そして戦後も、その罪に対する悔い改めを行うこともありませんでした。キリストの十字架によって、罪が贖われ、救われたことが示されているにもかかわらず、主が「わたしの他に、何者をも神としてはならない」と語る第一戒を、教会はこぞって、違反したのです。信仰が歪むと、隣人愛も歪みます。神社参拝を行わない他の教会（特に朝鮮半島の教会）に対して、彼らの信仰を理解することなく、圧力的に神社参拝を強要したのです。神の私たちに対する愛、キリストの私たちに対する愛を理解していなかった故であり、思弁的な信仰だったからです。

神の愛、キリストの愛を受け入れ、救いの喜びに満たされて生きる中であって、私たちが隣人の苦しみを知る時、完全にはできないことを恥じつつも、自分にできる愛の業を行うものへと掻き立てられるのではないのでしょうか。

## 「アブラハムの信仰」

### ヤコブの手紙二章一八〜二六節

二〇〇七年九月二三日

#### I. 信仰と行い

改革派教会では、創立宣言において、「一つ善き生活とは何ぞ。我等は律法主義者に非らず、又律法排棄論者に非らず」と告白しました。つまり信仰義認でありつつ、かつ律法廃棄論に陥らないバランスが必要です。

「信仰を持っていれば何をしても良いのだ」との主張に対して、ヤコブは「では、あなたの信じている神とは誰？」との問いかけです（一八節）。イスラム教も唯一の神を信じています。つまり「あなたが信じている主なる神は、誰で、信じるだけで何もしなくても良いと語っているのか」と言うことです。頭だけの信仰、思弁的な信仰になってはなりません。主なる神を信じるとは、御子イエス・キリストの十字架の贖いによって、あなたの罪が赦されたことを受け入れることです。そうであるならば、主人である主なる神の御言葉に全面的に服従する必要があります。ヤコブは旧約聖書を例に出して、「主なる神を信じる信仰とはどういうものであるか」を語ります。

#### II. アブラハムの信仰

主は、年老いたアブラハムを召し出して下さいましたが、子どもがいなかったアブラハムに対して「あなたから生まれる者が跡を継ぐ」（創世記一五章四節）、「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい」（五節）「あなたの子孫はこのようになる」（六節）とお語りになります。それに対してアブラムは主を信じ、主はそれを彼の義と認められたのです。しかしこれは始まりであり、完成ではありません。主に義と認められることで、すでに罪が赦され、神の御国における永遠の生命が約束されていますが、主の恵みと祝福に満たされた者は、信仰の成長・聖化と共に、信仰の実りとして行いが伴います。主は一〇〇歳になるアブラハムに息子イサクを授けられます（同二一章）。しかし主はさらにアブラハムに命じます。「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。わたしが命じる山の一つに登り、彼を焼き尽くす献げ物としてささげなさい」（同二二章二節）。アブラハムは主の相反する二つの命令に悩みます。しかしアブラハムは、結果を自分勝手に判断することなく、主の言葉に聞き従います。つ



まり信仰とは、主なる神を信じるだけでなく、主なる神が命じておられる御言葉に服従することであり、神の義に従った歩みを行うことです。ヤコブはこのアブラハムの信仰について語ります（二章二二～二三節）。

### Ⅲ．ラハブの信仰

ヤコブは続けて娼婦（遊女）ラハブの例を付け加えます（参照・ヨシユア二章）。彼女は主の御前に罪とされることを仕事としていました。しかし彼女は、主を信じ、エジプトから下り、約束の地に入ろうとしているイスラエルの使いを囲まい、彼らの命を狙っていたエリコの人々から彼らを救います。ヤコブはラハブも主が義と認められたと語ります（二五節）。

このラハブの事例は、取って付けたように見えます。しかし、この一つの事例を付け加えることにより、主による救いが、主を信じるすべての者に及んでいることを私たちに示しています。それは「アブラハムは、信仰の父。キリストに至るイスラエルの父祖である。だから主は彼を選び救った」という主張を否定するためです。ラハブに関してはさらに、主イエスの系図で、ボアズの母として記されます（マタイ一章五節）。

### 結．思弁的信仰ではなく、行いが伴う信仰

つまり、主は、主の御言葉を受け入れ信じた者は、思弁的に頭だけの信仰とはならず、その実りとして主の御言葉に聞き従う実りが伴うことを語ります。その上で、そうした人々は、身分・国民・地位に関係することなく、主による救いに与ります。ラハブも、主を信じ、主の御言葉に聞き従います。そのため娼婦の生活は辞めたことでしょう。だからこそ、メシアの系図にも、名が記される主からの賞賛が与えられたのです。

私たちは、主の御前に立つ時、罪深く、自らの罪を前にした時、この罪を赦して下さった主にただただ頭を垂れるばかり、感謝するしかありません。だからこそ、その主の御言葉に聞き従うことが求められています。しかし主の御言葉に聞き従う行動はなかなかできるものではありません。主に従えない自分もここにいます。しかし、真に主による救いに

導かれ、すでに罪の呪いの死から贖い出され、キリストの十字架による救いに導かれていきます。ただ信じるだけではなく、主の御言葉に聞き従い、キリストに倣う者として、日々、聖化され、結果として善き行いを行う者へと促されていきましょう。

## 「古を制御する」

### ヤコブの手紙三章一、五a節

二〇〇七年九月三〇日

### 序

ヤコブは、「行いが伴わないなら、信仰はそれだけでは死んだものです」（一七節）と語ります。そして三章に入り、その一つとして言葉を取り上げます。

### I．教師とは

「わたしの兄弟たち、あなたがたのうち多くの人が教師になつてはなりません」。ここでの「教師」を多くの神学者は「御言葉を語る教師」、つまり「牧師」と解釈します。この解釈もあながち否定することはできません。主の御言葉である聖書を、牧師は神の御言葉として解釈し、語り聞かせます。非常に厳粛さが求められます。そのため牧師になろうとする者は、内的な召命（本人の召し）と外的な召命（教会における承認）が求められ、さらに神学校における三年三ヶ月（現在は四年）の神学の学びが求められます。神学を行うこともまた、主からの外的な召命の表れです。中部中会で信徒説教者養成講座が始まったことを先週紹介しましたが、牧師に代わって説教を語る信徒にも、それに近い召命が求められます。それは、主が求められる福音理解ができない者には、人を導く資格がないからです（参照・ローマ二章一九～二二節、Iテモテ一章七節）。またそのために私たちは、牧師・神学生・信徒説教者のためにも、祈っていく必要があります。

しかしながらカルヴァンは、ここを次の様に注解します。「しかし、私としては、教師

という語は教会内で教える公の努めをもつ人々のことではなく、他人をきびしく批判する権威を勝手に手に入れていた人々を指すと考える」。今まで、すべてのキリスト者に対して、信仰とはどういうものであるかを語ってきたヤコブが、ここで牧師にだけ着目することは、少しばかり不自然な気もするからです。つまり牧師に限らず、人の上に立つ権威者は、下にいる人たちに対して命令するばかりか、必要なことを教えることが求められています。

## Ⅱ. すべての者が、言葉による罪を持っている

ヤコブがこの様に多くの人が教師になつてはならないと語るのは、日本語でも「口は災いの元」と語られますが、人は口から発する言葉において過ちを犯すからです（二節）。そしてそれらのどの過ちをとつても、主の御前に死に至る罪だからです（参照・ウエストミンスター小教理問八二）。ヤコブは、「言葉で過ちを犯さないなら、それは自分の全身を制御できる完全な人です」と語りますが、そういう人は誰もおらず、否定的に読み取らなければなりません。

## Ⅲ. 表面的な言葉、魂に届く言葉

近年、「言葉に重みが失われている」と言われます。これは由々しき事態です。それはインターネットの普及により、膨大な情報となり、少しばかり失言したところで、目立たないからでしょう。語られる一言一言が軽く、失言も増えています。失言を行つても、責任を問われることが少ないからです。

またそれに相まつて、見出しになるワン・フレーズが多用されるようになりました。ポスターが見栄えの良い立派な表紙で作られるようにワンフレーズが用いられます。もちろんそれに相応しい中身（説明）があれば、ワン・フレーズがすべて否定されるべきではありません。しかし同じ言葉を繰り返し、それがすべてであると納得させようとするのは、良くありません。つまり、私たちが言葉を発する時には、人を納得させ、さらに心・魂に届く言葉とならなければなりません。そしてどの様な質問、反論に対しても、弁証する必

要があります。しかしワン・フレーズを用い、裏打ちされた理論がない時、質問に対して誤魔化しがでできます。彼らは新たなワンフレーズを語り、質問に対する答えのすり替えを行います。それはただ耳障りの良い言葉で誤魔化し、本質のすり替えを行っているに過ぎません。

つまり、舌を制御することなく、誤魔化し、騙して、人を支配しようとしている人々があります。そういう意味では、私たちは聞く耳を持たなければなりません。何が真実であり、何が誤魔化しであるかを、的確に判断する能力が求められています。同時に、人に語りかける時は、語りかける相手を愛し、求めているもの、魂の訴えを聞き取り、その上で、魂に訴える言葉を語らなければなりません。人に教える立場、人の上に立つ立場にある人間は、それだけ人の語る言葉を聞く耳、見渡す目が求められます。聞く耳のある者でなければ、語ることもできません。口から発せられる言葉は、その人の存在、心の奥底が顕わにされます。

「人の話しを聞く時には、相手の目を見る」と語られます。それが愛から生じる魂のもった言葉であるか、誤魔化しの言葉であるかが、はっきりと見えてくるはずですが、だからこそ、誰もかしこも語るべき教師となるべきではなく、まず、己の罪を吟味し、己の罪を知り、人の心を受け入れる愛を持つ者でなければなりません。

## 「言葉―賛美と呪い」

### ヤコブの手紙三章五〇、一一節

## I. 人の言葉がもたらす結果

ヤコブは、主による救いに与つた者は、それに伴う行いが生じることを語ってきました。続けて口から発せられる言葉にどれだけ大きな力があるかを語ります。「どんなに小さな

二〇〇七年十月七日

火でも大きな森を燃やしてしまう」。日本では六二年前、広島と長崎に原爆が落とされ、また多くの都市が空襲に見舞われ、焼け野原となりました。現在でもイラクなど戦禍が絶えない国々があります。各々の戦争には様々な要因があるでしょうが、最終的に最高指令者の決定があり、命令があり、戦争が遂行されます。

舌から発せられる言葉には、それだけの大きな力があります。黙示録八章六、九節には、終末の時代の世界が描かれています。世界の三分の一が滅びます。現在、世界には、黙示録が語る如く、世界の三分の一を滅ぼすだけの兵器を手にしています。為政者の言葉一つで、世界中を火の海にすることのできる時代が、すでに到来しています。

## Ⅱ・世界を滅ぼす人の行い

舌は「不義の世界」です（六節）。現在、口から発せられる言葉により世界を滅ぼすことのできる時代を迎えています。それは根源的には人間の罪から来ています。全的墮落であり、人は生まれながらにして全面的に墮落し、罪人です。

主は最初に六日間天地万物を創造し、人は「神にかたどり、神に似せて、造られ」（創世記一章二六節）しました。しかし人は主のお与え下さったエデンの園の中から、採って食べてはならないとされた善悪の知識の実から採って食べ、罪が混入し、それがすべての人間に引き継がれています（同三章）。そのため主が人に統治するように命じられたあらゆる種類の獣や鳥なども、秩序を乱すこととなります。しかし、主の加護の内にあるため、生き物によって世界が破滅に向かうことはありません（七節）。従って、世界が滅びに至るとすれば、それは人の罪の業によるのであり、口から発せられる言葉によります。

## Ⅲ・救いと主の御言葉への服従

しかしこうした中、まだ主は世界を破滅に至らせることなく保持され、さらに主なる神による救いが私たちに提示されています。キリストの十字架の御業を受け入れ、主を讃美し信じる者が与えられるためです。これは滅びに向かっている私たちに与えられている主からの一方的な恵みです。私たちは、不義の世界に生き、全身が汚れ、地獄の火によって燃やされる世界へと向かっていました。そうした歩みをしている者は、主を讃美することなどあり得ません。しかし私たちに主は御霊により働きかけられ、私たちは御言葉により主を知り、主イエス・キリストによる救いを受け入れる者とされました。

しかし、主を信じ、主を讃美する者が、一方では人を呪う言葉を語ります（九節）。救われ罪赦された者であっても、なおも罪の残滓があるからです。そのため、主を礼拝している時は「自分はクリスチャンであり、主を信じている」との思いがありますが、礼拝が終わり教会から離れると、御言葉を忘れ、人の悪口を行ったり、非難したりします。これが私たち人間の姿です。そのため私たちは繰り返し罪の悔い改めが求められています。

主はキリストの十字架により、あなたの罪を赦されました。それは同時に、あなたと主なる神、あなたとキリストとの間に和解がもたらされました。だからこそ刑罰としての裁きではなく、赦しとしての永遠の生命が与えられたのです。同時に、あなたは仲違いしている隣人とも和解し、許し合うことが求められています。仲違いの原因が自分にあるのであれば、当然、悔い改め、赦しを求めなければなりません。また仲違いの原因が相手にあるにしても、あなたが主によって罪赦されたように、あなたがその人を許し、受け入れることが求められています。

私たちが、真のキリスト者として求められていることは、今語られている御言葉を、一週間覚えて実践し、御言葉に生きることです。今、礼拝を献げたら、「神への義務は果たした」ので、一週間何を行っても良いものではありません。主によって罪赦された者として、主の御言葉に生きることが求められています。主によって罪赦された者として、告白した信仰告白に生きることが求められています。真に主による救いに与る者は、今語られた御言葉を心に留め、一週間キリスト者として、キリストを証しし、キリストの語られた御言葉を生きる者とされています。そうすることにより、人を傷つけ、罪を犯す生活から、舌を制御し、主のお与え下さった恵みに感謝しつつ、すべての被造物を治める者とし、平和を実現するものとしての歩みを行っていくことができるものとされています。

序

ヤコブは主によって救われた者は、罪の自覚と悔い改めにより主の御言葉に聞き従い、善き業を行うことを語り、さらに舌を制御する者となるようにと語ってきました。

### I. 知恵・分別を身につけよ!

そして次にヤコブは、主による救いに与っているキリスト者がいかに賢く、分別をもつて歩むべきかを語ります(一三節)。世の中で賢さを判断する基準として、学歴が問われます。しかし主なる神が、私たち人間に求めておられることは、知恵を持ち、分別を持つことです。知恵つまり賢さを持つためには、学びが必要です。学歴はその一つの価値判断にはなるでしょうが、それだけではありません。あらゆる事柄を貪欲に学び、様々な知識を蓄え、物事を正しく判断する能力を身につける必要があります。しかしそれは学び続けなければ良いわけではありません。知恵にふさわしい柔和な行いが求められます。それは知識を蓄えることと同時に、御言葉を蓄えることが求められています。多くの知識を持つたとしても、自分勝手な解釈していれば、主が求めておられる分別を持つことはできません。持っている知識は、聖書的でなければならぬからであり、それが柔和な行いへとつながります。

宗教改革者は、聖書を自国語で読めるように翻訳を行うと同時に、小学校を設立し、キリスト者のすべてが聖書を持ち、聖書を自分で読めるようにしました。つまり知恵を得るための知識は、何よりも御言葉から得ることが求められます。そして、御言葉を蓄えることにより、物事の善悪を判断し、すぐに怒ったり感情を露わにすることなく、冷静に、聖

書的に正しく解決する方法を身につけていくことができます。言い換えれば、理性を失い感情的になることは、利己的になり聖書的な判断を失っています。

### II. 利己的な罪

従って主が求める知恵を得ようとすれば、聖書的になり、冷静さが求められます。そして、感情的になると、自ら正当性を主張・自慢し、一方で相手の過ちを指摘し、攻撃的になります。そこに対立が生じ、人を敬わず、人を傷つけ、盗み、偽証、貪りという十戒を犯す罪が生じてきます。それが、権力闘争、戦争へと発展します。

こうした行為は主による救いに与るキリスト者の姿ではありません(一四〜一五節)。悪魔から生じています。それは、罪の故に神との交わりが絶たれ、滅び、死に向かって歩んでおり、サタンの誘惑に呑み込まれています。それは非常に破壊的です。そこには主が私たちに求めておられる和解・平和はなく、混乱・争い・戦いが生じます。

しかし、主は私たちにキリストをお与え下さいました。キリストは、私たちのこうした利己心に満ちた感情から生まれてくる罪を、すべて知っておられます。そしてその私たちのすべての罪を背負うて十字架にお架かり下さいました。そして主は、キリストの十字架の故に、一方的に私たちの罪を赦し、救って下さったばかりか、私たちと和解し、神の国の約束をお与え下さいました。だからこそ私たちもまた、隣人との間で、和解することが求められています。そして主の御言葉に聞き従う者は、主による知恵を得ます。

### III. 救われた者に求められる生活

私たちは隣人との関係で、相手に落ち度がある場合、私たちは感情的になります。しかしこの時でも、感情的ではなく冷静さが求められます。私たちは、キリストによる愛により、一方的に罪が赦され救われました。主は、私たちと和解して下さいました。そして主は私たちに、対立ではなく、和解を求めておられます。短絡的になることなく、原因を探る必要があります。利己的ではなく、主の御声に耳を傾ける必要があります。それが純真さです。そして感情的なることなく、温和になることです。相手を受け入れようとす

る優しさを持つことです。状況を受け入れ、主により頼み従順になることです。偏見を捨て、憐れみの心を持つことです。そうすれば、聖書的な解決を行うことができます。このように一つの問題を解決することにより、主が求めておられる神の国の完成へとつながり、こういうキリスト者が集うことにより、教会が神の国を顕すこととなります。この後、私たちは主の晩餐に与ります。私たちは主による救いに感謝しつつ、日々主の御言葉である聖書に聞き続け、主の御意志を確認しなければなりません。そして世の中の様々な知識を身につけ、誤った判断を避け、聖書的に判断する力も身につけなければなりません。こうしたことの積み重ねが広まり、神の国の宣教がなされることにより、世界の戦争・争いを解決する力へと広がりを見せます。

## 「争いが起る原因は」

### ヤコブの手紙四章一、一〇節

二〇〇七年十月二日

#### I. 対立と争いの歴史

ヤコブは、主によって信仰が与えられた者は、その果実として善き業を行い、それが言葉や知恵に表れることを語ってきました。続けて、義の実は平和を実現する人たちによって、平和のうちに蒔かれると語ります。義の實り、つまり天地万物を創造された主がこの世において私たちに求めておられる究極の目的は、対立を除去し、平和がもたらす事です。しかし現実には、個人と個人、集団と集団、国と国が対立し合います。人が三人いれば派閥ができます。しかし主が、天地万物を創造された時、対立はありませんでした。人が創造されたのは、主を誉め讃え、すべての被造物を治め、平和をもたらし、それが求められました。そしてそれが可能でした。しかし、最初の人は主の御前に罪を犯し、その時以来、人類に罪が入ってきました。そして人は、神から離れ、自我という欲望を求めて歩み、滅

び・死に向かいます。そのため戦い・争いが生じます。そうしたことは歴史が証明しています。歴史を学ぶことは、人と人の対立、各々の時代にある人の欲望・妬み・自我の罪を知ることです。戦争や権力闘争で確認ことができます。

こうしたことは、主によって救われたキリスト者にも見られます。特に宗教改革期の教会に顕著に見られます。宗教改革期、プロテスタント教会では、教派を形成していき、それは聖書解釈の違いによって分かれていくわけですが、それは言い換えれば主なる神が聖書の御言葉を通して、私たちに何をお語り下さっているのかを、徹底的に御言葉から解釈しようとする中であって、ある人たちは、自分たちの都合の良いように解釈しようとしたからです。それは奴隷制度や人種差別にも見られます。アメリカの奴隷制度然り、南アフリカのアパルトヘイト然り、その中心にあったのはキリスト教会でした。それは自らの都合で聖書解釈を歪めてきた歴史そのものです。私たちは「改革派教会」を名乗っており、「聖書の御言葉によって改革し続ける教会」ですが、私たちは自我を捨て、徹底的に主の御言葉に聞き続けることが求められています。

#### II. キリスト者としての隣人

この様に自我を求め、罪の中、滅びにいたる私たち人間に対して、主は御子イエス・キリストをこの世にお遣わし下さいました。そして私たちの罪を償い、救いに導くために、キリストは十字架にお架かり下さいました。主なる神が、一方的に私たちと和解し、平和をもたらして下さいたのです。そして、主は私たちに対しても、世と和解し、平和を実現することを求めておられます。

ここで私たちが確認しなければならぬことは、私たちが和解し平和を実現する範囲です。善きサマリア人の譬え（ルカ一〇章三〇節以下）で、ユダヤ人である律法の専門家にとつて、隣人とは、律法を全うしているユダヤ人だけです。つまり永遠の命を受け継ぐことができると思われている人たちだけです。そのため誰か分からない倒れている人を助けることはしませんでした。しかし罪人とされていたサマリア人はこの人を助け、介抱し、

宿泊させます。真の隣人とは、相手の身分・立場・民族など関係ありません。私たちは、視野を広げなければなりません。私たちも弱く、誰でも苦手な人がいることでしよう。しかし彼らも私たちの隣人です。相手の気持ち、相手の痛みを知ろうとする思いが必要で、自分の思いだけではなく、相手を配慮する必要があります。それは裏返せば、自我を隠し、謙虚さ、遜りが求められます。これが、主なる神が天地万物を創造された時に、人に求められていた事であり、神の御国に向かっていている人の姿です。

### Ⅲ・神の国と私たち

そうすると私たちの主への祈りも変わってきます(三節)。自我の達成のために祈っても主が聞き入れて下さることはありません。自我の裏に、多くの場合相手の虐げがあります。そうした祈りは、神を自分より下に見下し、自分の奴隷として願い求めていることになりません。他人を見下し、恨み、妬むように、主なる神を見下しています。主に願っても適えられないのは、主の御心を知ろうとはせず、相手の心の痛みを考えようとしないからです。

しかし主なる神は、私たちの祈りを聞き届けて下さいます。それは、私たちが、創造主であり贖い主である主の御前に立ち、ひれ伏し、神の栄光のため、また神による救いが与えられたことに心から感謝と喜びを持ちつつ、祈る時です。つまり、私たちの祈りは、自分勝手なものではなくなり、主なる神の御心を知り、相手のことを思いやる祈りへととなります(五〜六節)。戦いを求めるのは、神の国を破壊しようとする悪魔の誘惑です。主の前にへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高めてくださいます。

「悪口を語る」とは・・・」

ヤコブの手紙四章一〜二節

二〇〇七年一月四日

### Ⅰ・悪口を語る「ト」

ヤコブは、自らを誇り高ぶる傲慢に陥ることなく、主の御前にあつて謙虚、謙遜さが主によって求められていることを語ってきました。そして続けて、「悪口を言い合つてはならない」(一一節)と語ります。人は、他人をネタにして悪口を言い合うことを良く行いません。悪口を語ることに、日頃のストレスを発散する人も少なからずあるかと思えます。この「悪口」は、直接相手に語ることと、その対象の相手がいらない時に語る陰口があります。ここでは前者です。またここで語る悪口とは、その人の悪い所を注意したり、改善を求めるものではありません。自らを高く置き、相手を自分よりも蔑み、相手を否定する言葉です。ここには悪意があり、その言葉を聞いた本人は傷つきます。「悪口」は、ギリシヤ語で、「語る」という語に「逆らう、貫く」という前置詞を伴った言葉であり、私たちが本来、建設的に話し合う時に語る言葉に逆行しています。

ここで一番問題となることは、相手と自分しか見えていないことです。客観的にすべてを理解できる第三者、特に一番忘れてはならない主なる神の存在が不在です。そのため、相手が主にある隣人としての意識もありません。そのため言葉は感情的で、悪意に満ちています。

続けてヤコブは語ります。「律法の悪口を言い、律法を裁くことになりません」。つまり、私たちが隣人に悪口を語る時、主を否定することにもなりません。つまり、キリスト者である私たちが自身と主なる神との関係が問われています。一対一の関係であり、神は関係ないとは言えません。主なる神は生きて働かれ、私たちの全生活を治めておられます。そして主は私たちが主の御前に集め、キリストの十字架により罪赦され、永遠の生命へと救われたと宣言して下さいます。天地万物を創られ、今なお天地万物を統べ治めておられる主なる神が、律法によりすべての基準を定めておられます。私たち人間は、罪人であり、主から与えられた律法によらなければ、物事の正しい判断を行うことができませぬ。だからこ

そ、私たちはこの律法により、自らの罪を知り、キリストに救いを求めます。そして主は、主を信じてキリスト者とされた私たちに對して、律法にひれ伏し、律法に聞き従うことを求めておられます。

そして主は「隣人を自分のように愛しなさい」（レビ一九章一八節、マタイ二二章三九節）と命じられます。これは十戒の第二の板の要約であり、第五戒と第十戒の戒めと結びついていきます。従って、隣人を愛することができず、悪意に満ちた言葉を発することは、主の律法に背いています。それは律法を無視していることと同じです。主がお作り下さり、私たちの生活を豊かにするために備え下さった律法が不要であり、悪法であると語っているのと同じです。不要だと思ふからこそ、平然と主がお与え下さった律法に逆らい、隣人に文句を語り、裁き、傷つけ、平和を乱す行為を行うのです。

## II. 信仰に基づく愛の行い

ヤコブはさらに語ります。「もし律法を裁くなら、律法の実践者ではなくて、裁き手です」。つまり、律法にひれ伏さなければならぬ私たちが、律法を作り、秩序を定めるべき立場、律法の上に立ち、自分が神になってしまいませぬ。主は「あなたは刻んだ像を造ってはならない」と命じられました。同時に「私の他に何者をも神としてはならないのであり、お金、お金、お金、権力、地位と同様に、自分自身を神に等しい位置に置いてはなりません。つまり律法に背くことは、すべてを統べ治めておられる主なる神の御前にひれ伏していません。つまり意味を失います。神を自らの下に置いていません。大きな罪です。私たちは、今、主の御前に頭を垂れ、悔い改め、今までの生活を改めなければなりません。

「律法を定め、裁きを行う方は、おひとりだけです」（一二節）。この方が、救うことも滅ぼすこともできる御力を持つておられます。兄弟に悪口を語る罪一つをとつても、永遠の死に値する罪です。この私たちを、永遠の死から引き上げ、私たちのすべての罪を担い、代わりに十字架の死について下さったのが御子イエス・キリストです。主は、キリス

トにあつて、私たち一人ひとりがキリストにある者として生きることを望んでおられます。神の子に相応しく、救いの喜びと希望を持つて日々歩むことを望んでおられます。だからこそ、主は、私たちが罪の刑罰としての死に引き渡されることなく、主の御前に、私たちを今、お集め下さっています。主は私たちを愛して下さっています。私たちは主の愛に氣付き、主の愛を受け入れなければなりません。ここに永遠の生命の喜びと祝福があり、主の被造物である私たち人間の最高の幸福があります。そして隣人を愛する行いが、人々に主を証しすることとなります（Iペトロ二章一二節、三章一六節）。

## 「誇り高ぶりのもたらす」と

## ヤコブの手紙四章一三〜一七節

二〇〇七年十一月二一日

### I. 野望によつてもたらされる結果

老若男女、夢を持ち、希望を持つて生きていかと思ひます。しかし、これらの夢・希望は、一方で野心・野望に満ちたものであることも多々あります。いま私たちに与えられた御言葉には、野心を抱いて生きることの罪が指摘されていきます。

「今日か明日、これこれの町へ行って一年間滞在し、商売をして金もうけをしよう」（一三節）。この言葉には、野望と共に強欲（金銭欲）がにじみ出ている言葉です。拝金主義とでも言つても良いでしょう。ここには、神はおるか他人も関係ありません。自分だけです。すると人は「ではクリスチャンは金持ちになつてはいけぬのか？」と尋ねます。決してそうではありません。主イエスも金持ちになることを否定しておられません。マタイ二五章一四〜三〇節ではタラントンの譬えが記されています。主人が旅行に出かける時、使用人にそれぞれ五・二・一タラントンの財産を預けます。一タラントンは六〇〇〇デナリオン、つまり六〇〇〇日分（二〇年弱）の給与に相当し、莫大な金額です。主人は帰つ

てきた時、五タラントン預けた者がさらに五タラントン稼いだことを誉めておられます。二タラントン預けた者がさらに二タラントン儲けたことを誉めておられます。そして一タラントン預けた者は、土に埋めていたことを叱責され、その一タラントンを最初の一〇タラントン持っている人に与えます。ですから、主は金持ちになることを否定されている訳ではありません。

しかし私たちは、現在日本における拝金主義と対峙しなければなりません。今の日本の状況は、民主主義という名の弱肉強食の世界であり、弱さを負っている者に対する配慮が取り去られ、愛のない世の中となっています。世に立てられている為政者の責任は大きいのです。「はつきり言っておく。金持ちが天の国に入るのは難しい。重ねて言うが、金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」（マタイ一九章二三〜二四節）。主イエスは「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」（同一九章二一節）と語られ、周囲の人々に対する愛が欠けていることを指摘されます。またルカ二二章一三〜二一節には、愚かな金持ちの譬えも記されています。これが「商売をして金もうけをした」結果です。

## II. 主によって与えられるタラントン

さらにルカ二二章では続けて「思い悩むな」と語り、主がすべてを養って下さり、すべての必要を満たして下さるお方であることを語ります（一二章二二〜三四節）。これはヤコブが四・一四で語ることと合致することです。主なる神が天地万物を創造し、今なお全世界を統治されています。私たちの今日の命もまた、主なる神の許しにより与えられています。それだけの権威を主は持つておられます。従って、今私たちが地上の命を授かっているのも主の恵みであり、また主は、主への信仰を告白し神の子とされた私たちが必要を求め祈り求めるものを、惜しみなくお与え下さるお方です。だからこそ、私たちは「主の御心であれば、生き永らえて、あのことやこのことをしよう」と言うべきなのです（一五

節）。

先程、マタイ二五章のタラントンの譬えを語りましたが、「タラントン」という単価は、英語の 'talent'、'タレント'（才能、能力）の語源となる言葉です。主は、私たちに必要なタラントン、つまり才能をお預け下さいます。それは私たちが生涯かけて稼ぐことができないような膨大な金額の価値のあるものであり、人それぞれ異なるものでしょう。主は、主が私たちにお与え下さったタラントンを用いて、創造主である主の栄光を称え、キリストによる罪の赦しと救いに感謝しつつ、主を証しする生活を、求めておられます。

主が私たちに命を与え、私たちにタラントンという必要な賜物を与えて下さいます。私たちはそれらを用いて主を証ししつつ歩む時、主は必要なものをお与え下さいます。私たちは、主への信仰を強め、主に委ねて祈り求める生活が、今求められています。私

だからこそ私たちは、将来の夢や希望を願う時、自らの欲望を願い求めるのではなく、主が私たちに必要なタラントンをお与え下さるよう祈るべきです。主は、主が私たちにお与え下さったタラントン（才能）を用いることを求めておられます。

## 「富を蓄える誘惑」

### ヤコブの手紙五章一〜六節

二〇〇七年一月一八日

## I. 金持ちの向かう方向

「よく聞きなさい」（一節）は「導かれる、連れて行かれる」の意味の言葉です。「金持ちは連れて行かれる」と語ります。私たちは金持ち、セレブに憧れますが、それは人間的な見方であって、主の目からすれば、自己目的化した滅びに至る道です。だからこそ金持ちが神の国に入るより、らくだが針の穴を通る方が易しいのです（マタイ一九章二三節）。ここでヤコブは、富んでいる者に対して、罪の悔い改めを求めているのではなく、



主の裁きの宣告を語っています。セレブな生活は、不幸であり、悲惨です。それは地上の生涯において訪れる場合もありますが、ここで語られることの主眼は、肉体の死後、最後の審判によってもたらされる永遠の死について語られています。

なぜ、主はそれほどまでに富に対する罪を指摘されるのでしょうか？ 主が富を創造された根拠を考えてみなければなりません。それは、富める者と貧しい者をつくり、差別と争いをもたらすためではありません。創造時、主は創造されたすべての者を人が統治することを意図していました。人がすべてのものを統治し、また人が主を讚美し、主を証ししつつ生きていく上にあつて、互いに分かち合い、助け合い、分配し合うために必要な制度として、主は富をおつくりになりました。しかし、人は罪を犯し、自らの欲望を求めようになりました。その結果、一部の者が富を蓄えることとなります。主が求められる本来の目的に用いられない時、主はそれを裁かれます。だからこそ主イエスは富める青年に貧しい人々に施すように命じられたのです（マタイ一九章一六節）。

## II. 金銀がさびる

「衣服に虫が付く」ことは理解できることです。しかし聖書は同時に「金銀もさびてしまします」と語ります。さびないと思っている金銀も朽ち果てます。昨今のバブルがはじけた状況を思い起こしていただきたいと思います。「マネーゲーム」という虚像に踊らされ、それがはじける時、一瞬のうちに多くの人々が財産を失いました。また、地震や洪水などの自然災害によって、財産をすべて失うこともあり得ます。戦争は、最たるものです。また、金銀を神の国に持つて行くことができなことも私たちは知っています。

しかし私たちは忘れてはなりません。金銀を含むすべてを支配しておられるのは主なる神です。私たちの持つている富を突然奪い去る権能も、主は持つておられます。そのお方が最後の審判の時に、裁きを下されます。私たちの持つている富を吟味されます。富を持つていること自体に罪があるわけではありません。その富を、どの様にして手に入れ、どの様に用いたかが問われます。

## III. 金持ちの裁きの理由

金持ちに対する主の裁きの理由を、三つ考えることができます。

第一は、人々から搾取したものにより、富を得ることを行つたからです（四節）。

第二は、たとえ、不正な働きを行わず、誰からもまた神からも後ろ指さされることを行っていないとしても、自分が多くの富を得た結果、周囲にいる人々の生活の状況を見ることができず、見下し、贅沢三昧、快樂にふける生活を行つているからです。富をお与え下さった主への感謝を忘れ、本来あるべき富の用い方を忘れているからです（五節）。

第三に、正しい人を罪に定めて、殺したことです（六節）。つまり、自らの欲望の故に、周囲の人々の貧しさを顧みることができず、愛の援助を行うことをしないからです。今の日本社会を見渡したらその結果が見えてきます。働き場がない人、働いても暮らしていくだけの十分な手当が得られない人、病気にいかかっても病院に行けない人、精神的な病気にかかる人がいます。またその結果、自殺、他殺、盗みなどの現実の犯罪も行われています。一人の者が金持ちになることは、周囲にどの様な結果をもたらしているか考えなければなりません。だからこそ、主を顧みることなく金もうけを考え、またその結果、贅沢三昧の生活を行おうと考えている者は、主の御前に罪に定められ、裁きに向かっています。キリストは、私たちのために十字架に架かり、罪の贖いをなして下さいました。神によって主の御前に集められた私たちは、すでに神の子とされています。だからこそ、私たちは富の虜になつてはなりません。私たちは、富をお与え下さる主に感謝しつつ、同時に、創造の秩序に従い、富を用いていかなければなりません。

## I. 「忍耐せよ」ではなく、「もつと寛容であらなれど」

新共同訳聖書は表題が付付けられ読みやすくなっています。しかし原典であるギリシャ語聖書には、表題だけではなく章・節も記されています。七節では表題「忍耐と折り」があり「兄弟たち」と語り始めます。いかにもここから新しい話しが始まるように思いますが、しかしここで大切な接続詞「だから、こういうわけで」が訳されています。つまり、「最初に兄弟たち、主が来られるときまで忍耐しなさい」と語られると、「なぜそのようなことを言われなければならないのか」と反発したくなります。しかし聖書は、この前で「富は朽ち果て、金銀もさびてしまします」と語り、主なる神を顧みることなく、欲望に生きる者は滅びると宣言しています。だからこそキリストの十字架によって救いに導かれたあなた方は、朽ち果てる地上の富に執着することなく、永遠の祝福である主を求め、主が来られるときまで忍耐しなさいと語っています。

また「忍耐」という語は、七節(二回)、八節、一〇節でも用いられています。が、「氣を長く持つ、寛容である、そのままにしておく」という意味も持つ言葉です。むしろ一〇節の「辛抱」や一節の「ヨブの忍耐」の方が、「苦難、忍耐」といった苦しみを耐え忍ぶ意味が強いのです。つまり私たちは「忍耐しなさい」と語れると何か息苦しいと思いがちですが、聖書は「もつとおおらかに、寛容でありなさい」と語っています。

また聖書ではよく、主なる神は多くの命令を發せられます。私たちはこれを「命令を守ったら救ってやる」、「救ってやるから命令を守れ」と読んでしまいがちです。そうであるならば信仰が窮屈になります。「そんなにしてまで救われようとは思わない」となります。しかし聖書をそのように読んではいけません。十戒では、前文が語られます。「わたしはあなたの神、主であつて、あなたをエジプトの地、奴隸の家から導き出した者である」。イスラエルは、エジプトに勝利・脱出し、約束の地カナンに入ることが約束されています。すでに神の民とされています。十戒はイスラエルが主から離れ信仰を失わず、

罪の誘惑に陥らないように、律法である十戒をお与えください。これは新約の時代にあつても同様です。この主の愛を忘れて、主の戒めを読んではいけません。

## II. 確実に主によつて与えられる神の祝福

ヤコブは農夫を例に語ります。農夫は、収穫があるからこそ、忍耐強く、農作業を行うことができるのだと。現代はコンピュータ社会であり、安直に結果を求めます。しかし人は目標があれば努力します。甲子園を目指す選手は練習に労苦を惜しみません。しかし概して、楽をして優雅な生活をしたという現代日本社会の風潮があり、そういう考えに対する警告がここで語られています。

ここで語られる忍耐は必ず喜びが訪れます。農夫は収穫の喜びを期待しつつ農作業にあたりますが、自然災害に遭えば労苦は水の泡です。しかし聖書は、忍耐の結果、喜びがあるであろうと語るのではなく、キリストの十字架により、神の子として永遠の生命が約束され、決定しています。主なる神を信じる者はすべて、真・義・聖である主なる神の子とされています。そこに例外はありません。自分から主の招きを拒絶しない限り、確実に永遠の生命の祝福に導かれています。だからこそ、「忍耐しなければ救われぬ」と金縛りになることなく、もつと氣を楽にして良いのです。

## III. ヨブに倣ふ

そして聖書は最後に、ヨブを例に出して語ります。ヨブは主の祝福により、子どもと財産に恵まれていました。しかしサタンは、主の許可を受けてヨブに襲いかかります。サタンはヨブの財産を奪い、子どもたちを奪います。さらにサタンはヨブの体をも蝕みます。サタンが主の許しがなければ、働くことができないのは、私たちにとって慰めです。だからこそ、私たちが襲う試練も、私たちは耐えることができます(一三節)。ヨブも主の言葉に耳を傾け、主の御前にひれ伏し、悔い改め、主に従います(四〇〜四一章)。そうすることにより、ヨブは以前にも増して、主の祝福に満たされま

した。これは主が私たちにお与え下さる神の国の姿を映し出しています。主が神の国において私たちにお与え下さる祝福と永遠の生命を覚える時、私たちは地上の生涯を、時として真に忍耐が必要でしようが、気を長くして乗り切ることができるとは思いません。

## 「誓いを立てる」

### ヤコブの手紙第五章一二節

二〇〇七年二月二日

#### I. 聖書が語る「誓い」

説教題を「誓いを立てる」としました。申命記一〇章二〇節では、「あなたの神、主を恐れ、主に仕え、主につき従ってその御名によって誓いなさい」と語り、一見ヤコブの言葉を否定しているようです。しかしそうではありません。私たちは「誓い」とは、誰に対してどの様に行われるべきかを、確認しなければなりません。ウエストミンスター信仰告白第二章「合法的宣誓と請願について」第一節では、「宣誓は、宗教的礼拝の要素であり、これによって、正当な場合、誓いをする人は、自分が主張し、あるいは約束することの証人となつてくださるようになり、また、自分が誓うことの真偽に依りて自分を裁いてくださるようになり、厳粛に神を呼び求めるのである」と語ります。つまり誓いは、主なる神がその証人となつて下さることを願いつつ、神礼拝としてなされます。

主なる神は、天地万物の創造者であり、統治者です。そして全知全能で在られます。私たちの行い、言葉、そして心の中まですべてご存じです。さらに主は完全なお方です。聖・義・真実であり、ここに罪や嘘が入ってくる余地はありません。このお方が誓いの証人となつて下さいます。だからこそ、信仰告白では続けて「自分が誓うことの真偽に依りて自分を裁いてくださるようになり、厳粛に神を呼び求めるのである」と告白します。主の御前であつて私たちは罪人で、欠けを持っています。主の御前に誓ったことを完全に実現する

ことは不可能です。不可能なことを誓うこと、実現できないことを誓うことは、主の裁きをもたらしめます。それは、神の御名を汚すからです（第三戒、レビ一九章一一―一二節）。だからこそ信仰告白は続けて語ります。「神の御名のみが、それによって人々が誓うべき名であり、誓いにおいて神の御名は、全く清い畏れと畏敬の念をもって用いられるべきである。従つて、その輝かしく、恐るべき御名によって、みだりに、あるいは軽率に誓うことや、ともかく何か他のものによつて誓うことは、罪深いことで、嫌悪されるべきである。」

では私たちがどの様な時に主の御前に誓うのでしようか。教会における誓約があります。第一は、洗礼・信仰告白における誓約です。主による救いを受け入れ、主の僕となる誓いです。主の御言葉に服従し、全身全霊をもって礼拝を献げ、主の働きのために奉仕し、献げ物を献げることが求められます。第二は、結婚の誓約です。第三は、教会役員としての牧師・長老・執事の誓約です。誓約は、主の御前にそして教会において責任が伴います。日々、主の御前に遡りつつ、主の働きを行うことが求められます。

#### II. 安易に誓うな！

だからこそ、ヤコブが語るように私たちは安易に誓いを行つてはならないのであり、主イエスも同様のことを語っておられます（マタイ五章三三―三七節）。

またヤコブは「天や地を指して、あるいは、そのほかどんな誓い方によつてであろう」と語ります。これは、誓いが主の御前に責任を果たすべき誓いではなく、権威付けとして人々に対して見せつけるための誓いだから拒絶されています。「信用取引」と言う言葉がありますが、私たちが様々な契約を行おうとすれば、保証人や保証となるものが求められます。主の御名や他のものによつて権威付けを行い、相手に納得させようとすること、見栄を張ることを行つてはなりません。また、誓いを果たさなくても許されるような、軽はずみの誓いをも戒められています。誓いは「冗談」では済まされないのであります。

#### III. 日々の生活を主の御前で誠実に

御子は、二〇〇年前のクリスマスの日、人として遜り、貧しい姿で人となられました。そして十字架にお架かり下さいました。それは、私たちの罪を償うためでした。私たちの姿は主の御前にすべて明らかになっていきます。そしてこのすべての行いによって主の裁きに遭います。私たちは、行いと言葉と心において、罪の刑罰としての死に値する者です。この私たちの罪を、キリストは十字架に背負うて、私たちの罪を償い、贖って下さったのです。

つまり、主は私たちをすべてご存じでありつつ、私たちを受け入れて下さり、愛して下さり、救いに導いて下さっています。だからこそ主の御前に誠実でなければなりません。人前で見栄を張り、人を欺いてはなりません。だからこそ私たちは人前で安易に誓いを立てることをしてはならないのであり、またする必要もありません。私たちは、誓いを立てる時は、主の御前に厳粛に、誠実に言うべきです。

## 「互いに祈り合う」

### ヤコブの手紙五章一三、一八節

二〇〇七年二月九日

#### I. キリスト者として積極的な生き方を求めるヤコブ

キリスト者としての歩みは、禁止事項を守るだけの消極的な生き方だけではありません。つまりキリスト者の積極的な生き方があります。それは言い換えれば、聖化の歩みであり、善き業です。つまり、十戒を含む律法には禁止事項の命令が語られています。主が意図されていることは、その背後に必ずキリスト者として積極的に行うべき事柄もあります。ここでヤコブは、具体的なことを四つ記します。

- ① 苦しんでいる人と共に祈ること（一三節 a）
- ② 喜んでいる人は、讚美の歌を歌うこと（一三節 b）

#### ③ 病気の人は、長老に祈ってもらいなさい（一四、一五節）

#### II. 実践的な行い

最初は共に祈ることです。苦しければ、苦しめる者と戦ったり、文句を語ることはありません。かと言って、ただ我慢しなさいとは語りません。確かに忍耐は必要です。しかし、主が私たちをキリストの十字架によって救いに導いて下さっています。そして私たちはすでに神の子となつています。主は私たちに祈ることをお教え下さり、主はその祈りを聞き届けて下さいます。神の子の特権です。主は私たちのすべてを御覧になられ、苦しみをも理解して下さいます。そして主は私たちの祈りにより、問題を解決し、平安をもたらして下さいます。私たちは疑うことなく信じて祈ることが求められています。

第二は、喜んでいる人は、賛美の歌を歌うことです。ここでの「喜び」とは、元気を出すと言うことです（参照・使徒二七章二二、二五節）。つまり「苦しみから抜け出し元気になって喜んでいる人」の事です。そして、「賛美」とは詩編を歌うことです。主によって与えられた喜ばしい恵みを、主に感謝し、主の栄光を誉め称える事が求められています。苦しい時のみ主に祈りを献げて、祈りが聞き届けられたらそれで終わりではありません。主の恵みに対する応答も、求められ、主と共に喜びを分かち合うのです。

第三は、病気の人は、教会の長老を招いて祈ってもらうことです。ここはカトリック教会が秘蹟の一つとしての「終油」を教える根拠として限らないからです。また、この文脈から、秘蹟を語るのも相応しくありません。むしろここでは、「信仰に基づく祈り」について語られているのであり、油を塗ることは治療方法の一つと考えればよいのです。

長老を招いて祈ってもらうのは、長老は、信仰を持って主にすべてを委ねて祈るからです。長老（牧師は教える長老、長老は治める長老）は、主によって召されたと共にそれだけの信仰が求められています。彼らの祈りに力があるのではなく、主にすべてを委ねる信

仰を持って祈ることにより祈りが聞き届けられます。

最後に、罪を告白し合い、互いのために祈ることです。ここで病気の原因として罪が語られているように思えますが、聖書は病気のすべての原因が罪にあるとは語りません。むしろ、主イエスが病人たちをいやされる時、彼らの病気は、主の栄光が示されるためであることを語り、主イエスも本人や家族の罪の故ではないことを語られます。

むしろここでは、主による罪の赦しが与えられるように祈ることが求められます。主はキリストの十字架によってすでに私たちの罪を償って下さっています。そして罪を赦し、救いをお与え下さっています。そのために、私たちは主の御前に罪の告白と悔い改めを行い、そして救いの感謝の祈りを求めておられます。

### Ⅲ・正しい人の祈り（参照・列王上一七章一節、一八章一、四一〜四六節）

ヤコブは最後に正しい人について語ります。正しい人（義人）の祈りは、大きな力があり、効果をもたらします。義人の代表がエリヤです。しかしエリヤは完全に正しく、完全に聖いために祈りが受け入れられたのでしょうか？ そうではありません。義人とは、キリストの十字架によって罪が赦され義とされた人です。つまりキリスト者のことです。道徳的に正しく、完全な人の事ではありません。強いて言えば、少しばかりも疑わず、祈りが主によってすべてが聞き届けられるとの信仰をもって、主にすべてを委ねて祈る人のことです。そうした人の祈りは、聞き届けられ、大きな力、効果をもたらします。

### 「真理への道へ連れ戻す」

### ヤコブの手紙五章一九〜二〇節

二〇〇七年一月一六日

今回でヤコブの手紙が終了しますが、この手紙にはパウロの手紙のように最後の挨拶は

なく、唐突でまだ言葉が続くかのようです。

そして最後に寄られていることは、神の御国における一人の魂の尊さについてです。ここで、「真理から迷い出た者」という言葉が問題になります。多くの場合、一度キリストの福音に導かれ信仰を告白したものの、教会から離れた者と解釈します。私もこの解釈が正しいかと思いません。一方、まだ神を信じていない未信者のことであるとの解釈もあります。キリスト教会の使命からすれば、こういう解釈をしたいとの思いも理解できます。今日は、この両方の解釈に関して考えてみようと思います。

ヤコブは今までキリストによる救いに伴う善き業について語ってきました。キリストの十字架による罪の赦しと救いが示され信仰を告白した者は、信仰の実りとしてキリストに倣う善き業へと導かれていきます（参照・ウエストミンスター信仰告白一八章一節前半）。

しかし現実には、信仰を持ちつつもなかなか信仰の实りを表さない者もあれば、さらに一時的に教会から離れる者もいます（参照・同一八章四節前半）。私たちの教会にも、そうした方々があり、心が痛みます。祈りの課題です。そしてヤコブは、こうした人たちにこそ、働きかけを行うべきであると語ります。罪人の魂を死から救い出し、多くの罪を覆うことが必要です。教会から離れ、主への信仰から遠ざかることは、死に位置しているからです。本来あるべき場所に連れ戻される必要があります。そのために祈らなければなりません。必要ならば働きかけを行うべきです。これこそ神の愛の表れです。キリストの十字架によって罪が償われ、救いにいれられるはずの人間が、死に位置することを、主は望まれています。

しかし、私たちは焦る必要はありません。神は、神の民をすでに定めていて下さっているからです。だからこそ、神の民は人生の中でどの様な試練や誘惑にあっても、一時的に教会から離れたとしても、主は彼らを捉えていて下さいます。神の予定とは、真に救いに入られながらも、一時的に神から離れている者たちも神の民として含まれています。特に家族や友人にとっては、非常に希望に満ちた教えです（参照・信仰告白一八章四節後半）。

だからこそ、私たちとしては、主の御前に祈りつつ、主の御言葉に従い、彼らに対する働きかけを行えばよいと思っています。

一方、キリスト教会に与えられた使命は福音宣教であり、ヤコブ書の文脈からは離れるのですが、この様に解釈したい気持ちがあります。信仰の確信をもつまで長く待ち、多くの困難にぶつかる人も多くあります（参照・信仰告白一八章三節）。つまり、主によって定められ神の子とされている者であっても、ある者は教会に導かれるまでに長い年月がかかり、年老いてから主に出会う者もいます。また、早くに教会に導かれても、信仰を告白するまでに時間を要する人もいます。彼らに対する宣教を、主イエスは求めておられます（マタイ二八章一六、二〇節等）。

主の願いは失われた魂を取り戻すことです。ルカ一五章一―七節にある見失った羊の譬えで説明することができますでしょう。主は自らが養っておられる羊が一匹でもいなくなれば、他の九九匹を野原に残して、いなくなつた一匹が見つかるまで探して下さいます。つまり、本来、主が神の民として定めて下さっている者が、まだ神を信じていなければ、主はその人が教会に導かれ、主を信じ、御言葉に従った実りある生活へと導かれるまで、探し続けて下さいます。そしてその人が神の民へと導かれることは、天の大きな喜びです。

今回で、約半年にわたって読み続けてきたヤコブの手紙を読み終えます。宗教改革者ルターは、信仰義認が語られることなく、行いを求めるこの手紙を「藁の手紙」と語りました。しかし、キリストの十字架により罪が赦され、神の救いに導かれた民は、キリストの僕として、キリストに倣う生活へと促されます。そしてさらに、このキリストに倣う生活とは、キリストの愛、神の愛の実践の生活でもあります。すでに私たちを救いに導き給う主なる神が、さらに一人、二人と、罪の中にある者を、救い出したいとの愛を持っておられます。御言葉に聞き、御言葉を実践していく者でありたいものです。